

令和7年度

農業試験場

業務年報

令和8年3月

福井県農業試験場

令和7年度業務年報目次

1. 研究成果

- (1) 実用化技術 … 1
- (2) 登録品種・特許等 … 1
 - ア 品種登録・特許等出願の状況 … 1
 - イ 保有する登録品種・特許等知的財産一覧 … 1

2. 研究の概要

(1) 戦略的研究開発事業

- ア 冬から春の観光需要を満たす福井県オリジナルイチゴ品種の育成（R7年度～R12年度） … 1

(2) 地域科学技術振興研究事業(産業技術課)

- ア 中山間の未来をうるおす超省力コンパクト園芸の確立（R5年度～R8年度） … 2
- イ ウメの超省力・スマート果樹栽培体系の確立（R5年度～R10年度） … 2
- ウ 大規模園芸ミディトマトの超多収・安定生産技術の開発（R7年度～R10年度） … 2
- エ 小ギク生産拡大に向けた省力生産技術の確立（R6年度～R8年度） … 3
- オ 8月出荷で高収益化！ブドウの早期収穫技術の開発（R6年度～R10年度） … 3
- カ 緑肥等を組み合わせた持続可能な水田利用体系の確立（R5年度～R8年度） … 3
- キ 水稻の高温登熟耐性に関する育種素材の育成と新規選抜技術の確立（R6年度～R10年度） … 4
- ク スマート農機を活用した水稻有機栽培技術の確立（R7年度～R9年度） … 4
- ケ ドローンを活用した生育診断に基づく施肥技術開発（R6年度～R9年度） … 4

(3) 現場移転促進(フォローアップ)を図る開発技術

- ア 効率的な白ネギ灌水技術の確立 … 4

(4) 予備試験

- ア 大規模施設園芸ミディトマトにおける超多収・安定生産技術の開発 … 5
- イ ブドウ「福井GR1号」の果房改善技術の検討 … 5

ウ	イチゴ新品種の電照効果の検討	…	5
エ	新規導入果樹の品種比較	…	5
(5)	電化協会委託試験		
ア	ミディトマト‘華小町’挿し穂の冷蔵貯蔵法の開発	…	5
(6)	その他事業		
ア	病害虫発生予察事業（国・県）	…	6
	（ア）水稻病害虫	…	6
	（イ）大麦・大豆・ソバの病害虫	…	7
	（ウ）野菜・果樹・花きの病害虫	…	7
イ	病害虫防除所運営事業（国庫）（S26年度～）	…	7
ウ	農薬抵抗性検定事業（国・県）（S52年度～）	…	7
	（ア）トマト葉かび病の耐性菌検定	…	7
	（イ）イネウンカ類の薬剤感受性検定	…	8
エ	減農薬防除体系実証事業（国・県）（R4年度～R7年度）	…	8
オ	重要病害虫等侵入警戒調査事業（国・県）（H26年度～）	…	8
	（ア）コドリング	…	8
	（イ）トマトキバガ	…	8
	（ウ）火傷病	…	8
	（エ）スイカ果実汚斑細菌病	…	8
	（オ）ウメ輪紋ウイルス	…	8
	（カ）イネミイラ穂病菌等その他国内未発生 of イネの病害虫	…	8
カ	土壌保全対策費（土壌環境基礎調査事業）（S54年度～）	…	8
キ	肥料検査登録事業（S51年度～）	…	9
ク	奨励品種決定調査事業（S39年度～）	…	9
	（ア）水稻	…	9
	（イ）麦類	…	9
	（ウ）大豆	…	9
ケ	原原種・原種ほ設置事業（S38年度～）	…	9
コ	優良種子生産体制確立（S38年度～）	…	9
サ	水稻生育指標調査（S45年度～）	…	9
シ	主要農作物優良品種育成事業（県）（R2年度～）	…	10
ス	マット苗仕様両正条田植え機の実用化モデル開発および直交機械除草を核とする水稻有機栽培の実証（クラスター事業）（R7年度～R8年度）	…	10

3. 普及指導業務実績

(1) 農業経営発展支援	…	10
ア リーディングファームの育成	…	10
イ 関係組織連携による経営体の発展支援	…	11
ウ 集落営農救援隊による集落営農組織の経営支援	…	11
エ 女性活躍支援	…	12
(2) いちほまれ栽培技術の確立と普及	…	12
ア 栽培マニュアルに基づく生産指導	…	12
イ 増収にむけた追肥基準の策定	…	12
(3) スマート農業および有機農業の普及拡大	…	13
ア 普及活動に活用できるスマート技術の体制整備	…	13
イ 施設園芸でのスマート農業の加速	…	13
ウ 有機農業の消費者理解醸成に向けたイベントの実施	…	13
エ 園芸における人と環境にやさしい栽培技術の導入促進	…	14
(4) 園芸タウンの推進	…	14
ア 園芸タウンの推進	…	14
イ ネギの広域産地化	…	14
(5) 園芸タウン整備による産地振興	…	14
ア ウメの産地再生に向けた振興ビジョンの作成	…	14
イ ブドウの市場出荷を促進する体制づくり	…	15
ウ ブドウ新品種の生産振興とブランド化	…	15
(6) 畜産経営支援	…	15
ア 地域内での自給飼料生産拡大に向けた支援	…	15
イ 酪農・肉牛肥育経営への支援	…	15
ウ 鳥インフルエンザ防疫対応<普及計画に記載無し>	…	15
エ 今後の方向と課題	…	15
(7) 調査研究や研修等の活動	…	15
ア 外部評価検討会の実施	…	15
イ 普及指導計画や調査研究への助言	…	16
ウ 普及指導員の資質向上	…	16
エ 技術解決チーム会の開催	…	16
オ 全国会議等への出席による情報収集	…	16

4. 県民に開かれた研究機関を目指す活動

(1) 高校・大学受入授業	…	16
(2) プレスリリース実績	…	16
(3) 講演会・出前講座	…	17
(4) 園芸 LABO の丘による園芸教室と体験講座	…	19

5. 農業者等の視察対応	… 20
6. 論文、雑誌、著書、発表、広報等	
(1) 論文	… 21
(2) 著書	… 21
(3) 学会等講演発表	… 21
(4) 雑誌	… 22
(5) 広報	… 22
ア 日本農業新聞 アグリトゥモロウ・その他	… 22
イ 福井県植物防疫協会 ふくい植防だより	… 22
(6) その他(発行物等)	… 22
7. 職員の研修、客員教授の招聘、職員の受賞	
(1) 客員教授の招聘	… 22
(2) 職員の受賞	… 22
8. 一般報告	
(1) 施設	… 23
(2) 予算	… 23
(3) 組織と職員数	… 25
(4) 人事	… 26
(5) 主な備品等(令和7年度、50万円以上)	… 27

1. 研究成果

(1) 実用化技術

No.	技術名	内容
1	安価な簡易棚を利用したキウイフルーツ栽培	単管パイプとクランプを使用した自主施工も可能な管理棚を利用することで、棚資材費を約47%削減できる。また、簡易棚を生かした密植栽培を行うことで、植栽5年目で収量2.0t/10aを達成できる。
2	高温に強い水稲早生新品種「はな結び」	福井県における水稲早生品種は、関西や中京市場にいち早く出荷できる重要な基幹品種である。早生の「ハナエチゼン」は水稲作付面積のおよそ25%を占めるが、「ハナエチゼン」の高温登熟性は“やや強”であり、収穫翌夏の食味が低下しやすい傾向がある。そこで、高温に強く収穫翌夏にもおいしい水稲早生新品種「はな結び（旧系統名：越南315号）」を育成した。
3	栽植密度増加による白ネギ褐色腐敗病の軽減技術	褐色腐敗病は白ネギの主要病害の一つであるが、対応する防除薬剤が少なく、近年被害が拡大している。本病の発生は、葉鞘径が太く1本あたり重量の大きい株が多い。そこで、育苗時の播種粒数を増やし、栽植密度を高めて葉鞘径の肥大を抑制することで発病割合を低下させる技術を開発した。本技術は、褐色腐敗病の発病が多い条件下において所得の向上が期待できる。

(2) 登録品種・特許等

ア 品種登録・特許等出願の状況

(ア) 品種登録出願

稲種「はな結び」、トマト「福井TM1号」、イチゴ「福井ST1号」、イチゴ「福井ST2号」
特許出願なし。

イ 保有する登録品種・特許等知的財産一覧

(ア) 品種の登録

品種名	植物の種類	品種登録年月日	登録番号
福太夫	うめ種	平成17年3月23日	12985
オータムヴィオレミニ	らっきょう種×さいいとらっきょう種	平成19年3月2日	14993
イクヒカリ	稲種	平成19年3月15日	14999
ニューヒカリ	稲種	平成21年7月31日	18349
まんぷくもち	稲種	平成22年2月19日	19053
あきさかり	稲種	平成23年3月2日	20431
いちほまれ	稲種	令和2年12月9日	28234
さかほまれ	稲種	令和5年1月18日	29497
越南300号	稲種	令和7年4月7日	30918
福井1826号	トマト種	令和7年7月23日	31099
福井1832号	トマト種	令和7年7月23日	31100

(イ) 品種の登録出願中

品種名	植物の種類	品種登録出願年月日	出願番号
シャインパール	稲種	令和4年4月4日	36206
新福1号	稲種	令和4年9月13日	36440
福井GR1号	ブドウ	令和7年3月28日	37957
はな結び	稲種	令和8年2月20日	38421
福井TM1号	トマト	令和8年3月30日	38496
福井ST1号	イチゴ	令和8年3月30日	38497
福井ST2号	イチゴ	令和8年3月30日	38498

(ウ) 特許の取得

発明の名称	特許登録年月日	特許登録番号
電子レンジとポリエチレン袋を用いた低コスト植物無菌培養方法	平成19年9月14日	4009685

2. 研究の概要

(1) 戦略的研究開発事業

ア 冬から春の観光需要を満たす福井県オリジナルイチゴ品種の育成(R7年度～R12年度)

品種開発研究部 園芸育種研究G 林恵美子

収穫後半においても高い果実品質を維持できる品種、ならびに色・形状・香気などに特徴を持ち、既存品種との差別化が可能な品種の育成を最終目標として、新品種開発に向けた実生選抜試験を実施した。

まず、令和7年春に、県内外で栽培されている既存優良品種および農業試験場が育成してきた有望系統の中から、目的とする特性を補充し合う組み合わせを精査し、複数の交配を行った。その結果、合計で約1,000粒の種子を得た。得られた実生は播種後、健全な初期生育を確認しながら育苗を進め、うち600株を9月19日に農業試験場パイプハウス圃場へ定植した。定植後は、生育のばらつきや特性の差異を把握するため、草丈について定期的に調査を実施した。

11月27日からは収穫を開始し、果実品質の評価として官能評価を行った。官能評価は農業試験場内の複数の評価者によって実施し、甘味、酸味、果実形状、フレッシュ感、後味といった重要な品質要素について、1(不良)～5(優れる)の5段階評価で採点した。評価者間で基準に差異が生じる可能性を考慮し、各項目の評価値について標準化処理を行い、個体ごとの特性がより客観的に比較できるようにした。

これらの調査結果を総合的に解析した結果、目的とする特性を有すると判断される有望な系統を抽出し、令和8年春に約100株を一次選抜系統として選抜する。選抜にあたっては、果実の外観や食味だけでなく、収穫後半における品質低下の程度や生育安定性も考慮する。

今後は、選抜された系統について圃場規模での栽培試験、収量調査、果実品質の詳細分析などを行い、環境条件の変化に対する安定性を検証する予定である。その結果を踏まえて二次選抜を行い、最終的には新品種候補として育成系統を絞り込み、現場導入に向けた特性評価を進めていく計画である。

(2)地域科学技術振興研究事業(産業技術課)

ア 中山間の未来をうるおす超省カコンパクト園芸の確立(R5年度～R8年度)

園芸研究センター 野菜・花き研究G 清水美櫻

簡易養液栽培システムに適した品目の選定のため、ミニトマト”CF ネネ・エコスイート”、大玉トマト”パルト”、小玉スイカ”ピノ・ガール”、メロン”マルセイユ・アンデスナナ・アールスナイト夏系2号”、トルコキキョウ”ボヤージュ(R)”の栽培を行った。

ミニ・大玉トマトでは、夏季の高温の影響を受けたため、2作目の収量が減少した。特に大玉トマトでは、収穫想定段数を7段としていたが、収穫が可能であった段数が1作目で5～6段、2作目で2～3段までにとどまった。メロンについて、マルセイユの立ち栽培を行ったが、立ち栽培により樹勢が弱り小玉傾向になった。また、アンデスナナ・アールスナイト夏系2号に関して、着果数は1株あたり1～2玉が限界であった。

小玉スイカについて、収穫遅れの影響があり、裂果が多い結果となった。

トルコキキョウについて、二度きり栽培を行ったが、夏の高温の影響1度目の収穫の後ほとんどの株が欠株となった。そのため、簡易養液栽培システムには適さない品目と考えられた。

夏季の高温対策としてミニトマトの作型の検討を行った。通常の半促成栽培と抑制栽培を組み合わせた作型と3月下旬・5月中旬・7月下旬に定植を行う作型を比較した。3作行う作型と2作行う作型との比較では、収量が約80kg/a増加したが、1作増えた分の経費増加を吸収できず、経営収支は悪化した。そのため、簡易養液栽培システムには不相当と考えられた。

天井フィルムと側窓を全開にすることにより、ハウス内気温の昇温抑制効果が見込める可能性が示唆された。次年度では内張遮光カーテンの遮光率をあげることで、さらなる昇温抑制効果を見込めるかどうか検討を行う。

イ ウメの超省カ・スマート果樹栽培体系の確立(R5年度～R10年度)

園芸研究センター ウメ・果樹研究G 神田美奈子・野尻智洋

作業性に優れ、省力的なネット収穫方法を検討するため、ネットを高い位置に展張する目的でウメ樹の周囲に単管パイプで枠を組んだ。ほ場にパイプが林立することになるため、防除に及ぼす影響について調査した。その結果、パイプがあるとスピードスプレーヤーがほ場内を均一に走行できないため、農薬の散布に偏りができ、黒星病の発生が多くなった。

高い位置でのネット収穫に用いるネット等の資材について検討するため、防風ネットおよびメッシュシートを展張し、落下果実数とケシキスイ類の被害を調査した。メッシュシートは伸縮性がなく、ウメの主幹との間に隙間ができるため、ネット外に落下する果実が多くなった。防風ネットは伸縮性があるため、主幹に沿って設置できるが、張りすぎるとネット外に飛び出る果実が多くなり、1割程度ネット外に落下した。

地面に敷設するネット収穫に用いる資材の違いがケシキスイ類の被害に及ぼす影響について調査した。試験区は、1mm目寒冷紗、防草シート+防風ネット、防風ネットのみの区を設置した。落下果実を調査した結果、ケシキスイ類の被害は寒冷紗区で少なくなる傾向がみられたが、収穫を毎日していた期間は被害がどの区も少なく、収穫期間を空けると被害が増加することから、被害の抑制には毎日の収穫が重要であることが推察された。

灌水がウメの生育に与える影響について調査した。5月1日～6月20日の収穫まで樹冠下4m×4mの範囲をタイベックシートで被覆し、雨水を制限した被覆区、土壌pF値が4月から収穫までは1.5以上、収穫後から9月までは2.5以上となった日に20mmのかん水を行うかん水区を設置した。葉中窒素含有率は、かん水区で高く維持された。被覆区では6月に1年生枝の葉の黄化が観察された。

ウ 大規模園芸ミディトマトの超多収・安定生産技術の開発(R7年度～R10年度)

園芸研究センター スマート園芸研究G 坂本浩、藤田雄大、中川武

大規模ミディ栽培の周年長期採り作型における、収量向上および高温期の草勢維持に適した強勢台木品種の選定を行った。台木の生育は、‘TTM-079’が優れ、播種20日後の草丈が14.1cmと高かった。‘アーノルド’は苗テラス下での育苗で水疱症がひどく、株の葉が脱落したため、苗テラスでの台木養成と育苗には不適と考えられた。‘フォルタミーノ’、‘アーノルド’は、接木の活着が悪く‘華小町’穂木との親和性が低い可能性があった。‘TTM-079’、‘スパイク23’、‘カルディア’は草丈が21.8～22.7cmと長く、スプレーポニック栽培で扱いやすい苗に生育した。定植後の生育には大きな差はみられなかった。収量には台木の品種間差が見られた。

8月の株当たり収量は、‘エンペラドール’、‘カイゼル’、‘アーノルド’が主枝、側枝に限らずやや劣った。9月の

収量は‘エンペラドール’、自根が低かった。10月の収量は‘TTM-079’主枝が883.2g、側枝が944.8gと‘エンペラドール’の3割増収となった。12月までの年内総収量は、‘TTM-079’が最も多く、‘アーノルド’、‘カルディア’も多かった。これら3品種は平均一果重が20gを超えていた。

8～2月までの累積収量は‘TTM-079’が‘エンペラドール’と比較して3割増加した。

以上の結果、台木品種は‘TTM-079’が2月までの収穫量や平均一果重の面から適していた。また、別試験で接木苗と自根苗を栽培し、収穫果実のGABA含有量を調査したが、接木による増減はみられなかった。

夏季の昇温抑制と光合成促進技術の開発では、ダクト送風による群落蒸散の活用を目的として、群落内直接送風およびハウス内気流速の影響を検討した。送風区では無処理区と比較して収穫果数が増加傾向を示し、総収量も微増した。風速0.1～0.6m/sの範囲では、減収等や植物への障害はみられなかった。

エ 小ギク生産拡大に向けた省力生産技術の確立(R6年度～R8年度)

園芸研究センター 野菜・花き研究G 山本浩平

小ギクの生産において、栽培管理、防除、収穫の3つの観点から省力技術を検討している。

栽培管理では、県内栽培品種を含む30品種において定植前摘心を実施した。昨年度の結果から慣行と同等の切り花長を得られる摘心位置が明らかになったことから、今年度は定植前摘心に適した品種の選抜と作業性を調査した。その結果、5品種において採花本数が3本に近く、盆需要期に開花する切り花長が70cm以上であり、定植前摘心に適した品種であると考えられた。摘心の作業時間は、芽切鉋で慣行比約23%減、トリマーで約97%減となった。次年度は、省力効果の大きいトリマーでの摘心方法を検討する必要がある。

防除では、小型多機能型ロボット(株式会社DONKEY製:販売モデルCP200)を利用して、防除全体に要する作業時間や心拍数を計測した。ロボットによる作業時間は慣行比約37%減となった。身体的負担は、平均心拍数が116bpmとなり慣行(143bpm)よりも低く抑えられた。次年度は、現地導入に向けて、実際の防除効果について調査する必要がある。また、白さび病防除に関して、今年度は白さび病が入手できず、防除効果は判定できなかった。次年度は、接種をしたうえで高温蒸し込みや生物由来資材の活用等も検討していく。

収穫では、県内栽培30品種において電照に適した品種検討を行った。高温少雨により、電照区及び慣行区ともに開花が遅れたが、相対的に判断し、有望品種を選定した。また、草刈り機等を用いた収穫方法では、作業時間の大幅な省力化につながったが、切断面が荒く、日持ち日数は短い傾向が見られた。水揚げ能力は、十分な検討ができなかったため、次年度に再度試験予定である。

オ 8月出荷で高収益化!ブドウの早期収穫技術の開発(R6年度～R10年度)

園芸研究センター ウメ・果樹研究G 田中裕介・佐々木雅

‘シャインマスカット’の無加温ハウス内での被覆方法の違いが生育や収穫期に及ぼす影響では、休眠期から二層中空構造ポリエチレンフィルムで被覆処理を実施することで収穫期が8日～18日前進化し、果実品質にも影響はなかった。

‘シャインマスカット’の無加温ハウス内での地温の違いが生育や収穫期に及ぼす影響では、休眠期から農業用ヒーター線にて培土を加温することで収穫期が8日前進化し、果実品質にも影響はなかった。

‘福井GR1号’の無加温ハウスでの二重被覆処理が生育や収穫期に及ぼす影響では、休眠期から厚さ0.1mmの農P0フィルムで被覆処理を実施することで着色完了期までの生育ステージは4～12日早まり、収穫期が5日前進化した。果実品質に影響はなかった。

無加温ハウス内でのベレゾーン期以降の積算日射量が‘シャインマスカット’の糖度及び収穫期に及ぼす影響では、ベレゾーン期以降の積算日射量は糖度との高い相関があり、積算日射量が800MJ/m²を超えると糖度が17%程度に達し、900MJ/m²を超えると糖度が18%以上に達すると推察された。

無加温ハウス内でのコンテナ栽培におけるブドウ‘シャインマスカット’の発根特性の検討では、発根量は4月～7月にかけて増加し、特に6月～7月にかけて発根量が多くなった。また、5月～6月にかけては、根が培土の下部に分布することから、より水分量の多い下部に根が集中する傾向があると考えられ、その後コンテナの培土全体に根が分布することから、コンテナ培土全体に灌水を行う必要があると考えられた。

発育速度モデルを利用した無加温ハウス栽培におけるブドウ‘シャインマスカット’の生育ステージ予測では、発育速度モデルとして、萌芽期を起点に毎時の発育速度DVRを積算していき、開花期にDVIが1にベレゾーン期にDVIが2になるような式DVR=0.001770811EXP{-220.5085(t+273)⁻¹}を作成した。無加温ハウス栽培では、萌芽期から開花期まで、開花期からベレゾーン期までは概ね50日前後で生育ステージが進行し、発育速度のモデル式からも、開花期やベレゾーン期をある程度予測することが可能であると考えられた。

果実袋の色の違いが‘シャインマスカット’の収穫期及び果実品質に及ぼす影響では、果実袋の色の違いで果実品質に影響はなかったが、無袋、白色で糖度上昇及び果皮色の進行が早まり、収穫期が前進化することが示唆されたが、無袋では、キズや病害果の発生が多かった。

結果枝の環状剥皮の処理位置の違いが‘シャインマスカット’の果実品質に及ぼす影響では、結果枝の処理位置に関係なく糖度上昇が遅れ、糖度も低い傾向にあったが、房重、酸度、果皮色には影響がなかった。

カ 緑肥等を組み合わせた持続可能な水田利用体系の確立(R5年度～R8年度)

次世代技術研究部 みどり戦略推進研究G 福島 朋行・塚崎 貴士

品種開発研究部 作物研究G 井上 健一(臨任)

【緑肥関係】昨年度と同様に2種類の緑肥(ヘアリーベッチ1品種、ライ麦1品種)を栽培、分析し、これまでと同様にヘアリーベッチは窒素とカリウムの供給、ライ麦はカリウムの供給が期待できると再確認された。

【子実トウモロコシ関係】昨年と同様に緑肥跡に2つの施肥体系で栽培した。緑肥はヘアリーベッチとライ麦および緑肥なしの3種類、施肥体系は化成肥料100%、化成肥料:鶏ふん50%:50%の2種類を設け、昨年より施肥量を減らして試験を行

った。収量は昨年の試験と似た傾向を示し、ヘアリーベッチ跡区で最も高くなり、ヘアリーベッチの肥料効果が高いことが再確認された。昨年度より施肥量を減らした結果、子実が小ぶりになったため、子実収穫量は3～4割減となったが、収量目標の600kg/10aは超えていたため、今回の施肥量でも問題ないと考えられる。低収になった要因として、施肥量を減らしたことのほかに、今年の夏は高温少雨であり、特に7月は例年の約10%しか雨が降らなかったため、乾燥により生育不良になったと考えられる。

【輪作関係(オオムギ、ダイズ)】 R5. 10月～R6. 10月に緑肥、子実トウモロコシを栽培した圃場でR6. 10月～R7. 5月にオオムギを、R7. 6～10月にダイズを栽培し、収量を調査した。オオムギ栽培では、前作の子実トウモロコシ栽培の有無による収量の差は見られなかったが、前々作に緑肥を栽培すると収量が増加する結果となった。ダイズ栽培では、子実トウモロコシ栽培の有無による差は判然とせず、ヘアリーベッチを栽培すると増加傾向が、ライ麦を栽培区すると減収傾向がみられた。

【現地試験】 上記と同様の試験を福井市の現地農家圃場でも行った。緑肥(ヘアリーベッチ)は、試験場圃場で栽培した時と同等の生重を確保することができた。子実トウモロコシ栽培では、坪刈りで480kg/10a、全刈りで398kg/10aとなり、目標値に届かなかった。オオムギ栽培では、前作に子実トウモロコシが前作水稻より精子実重が約40kg/10a増加した。ダイズ栽培では、子実トウモロコシを栽培した場合、水稻を栽培した場合より総莢数や百粒重、主茎長などが小さくなり粗子実重が減少した。

【ダイズ関係】 緑肥跡ダイズの狭畦栽培試験では、ヘアリーベッチ区で生育量や葉色が最も良好で、多収になり、前作緑肥なし区では倒伏が早期から確認され低収となった。この結果は、緑肥鋤き込みがダイズの収量増加に有効であることを示している。

キ 水稻の高温登熟耐性に関する育種素材の育成と新規選抜技術の確立(R6年度～R10年度)

品種開発研究部 水稻育種研究G 米田考志

令和6年度に見出した有望系統を高温ハウスで栽培し、高温登熟性の再現性を確認した。自然突然変異集団で見出した「笑みの絆」および「みねはるか」は本年度も高温登熟性に優れており、再現性を確認した。

本県の主要品種に重イオンビームを照射した後代 M2、150 系統の高温登熟性の評価を行った。(福井県立大学との共同研究部分の結果は非開示)。玄米品質による選抜で、原品種より品質が良い7 系統を見出した。

ク スマート農機を活用した水稻有機栽培技術の確立(R7年度～R9年度)

次世代技術研究部 みどり戦略研究G 福島朋行 スマート農業研究G 山口泰弘 佐賀泰孝

省力的で誰でも取り組める水稻有機栽培における除草技術、低コスト有機肥料の施肥技術を開発するため、スマート農機(両正条田植機、乗用除草機)活用を検討した。農研機構で開発された両正条田植機で田植し、乗用除草機に自動操舵システムを付け、経験の浅いオペレーターでも効率的に除草できる技術を確認した。

移植での植え付け本数を6本とすることで欠株率を低減させ、目標穂数を確保することができた。また、従来の中苗移植から稚苗移植に変更しても生育遅延などの問題は生じなかった。

また、低コスト有機質肥料として福井県内で生産される鶏糞を選定した。その鶏糞を両正条移植した圃場で栽培試験を行った結果、基肥窒素 3.5kg/10a 以上、穂肥窒素 3.5kg/10a 以上で収量が多かった。また、鶏糞の無機化は地力窒素量に影響されることが明らかになった。

ケ ドローンを活用した生育診断に基づく施肥技術開発(R6年度～R9年度)

次世代技術研究部 スマート農業研究G 清水愛子

センシングドローンを利用して県内主要水稻品種を分施肥栽培する技術を検討している。

センシングドローン Phantom4 Multispectral を用いて、「あきさかり」「いちほまれ」の最高分けつ期頃と幼穂形成期の植生指数 SRVI (NIR/R) を取得すると同時に、生育量(草丈(cm)×莖数(本/m²)×SPAD 値)を計測した。これにより、ドローン空撮で「あきさかり」「いちほまれ」の最高分けつ期頃と幼穂形成期の生育量を推定するモデル式を作成した。

「あきさかり」「いちほまれ」は、最高分けつ期～幼穂形成期の生育量凋落が収量へ大きく影響するため、低地力圃場において生育量と収量の関係を調査。その結果、収量 600kg/10a を確保するには、最高分けつ期頃の生育量が「あきさかり」は 110 万、「いちほまれ」は 140 万必要であることが分かった。最高分けつ期頃にドローン空撮で生育量を推定し、生育量が基準に満たない圃場は中間追肥を行う必要がある。

「あきさかり」について、収量 600kg/10a 確保のための穂肥量を調査した結果、幼穂形成期生育量が 150 万～200 万未満の場合は穂肥 4kg N/10a、生育量 200 万以上の場合は穂肥 2kg N/10a が必要であることが分かった。幼穂形成期にドローン空撮で生育量を推定し、穂肥指標に基づいて施肥することで高収量を確保できる。「いちほまれ」の穂肥指標作成は次年度引き続き行う。

(3)現場移転促進(フォローアップ)を図る開発技術

ア 効率的な白ネギ灌水技術の確立

園芸研究センター 野菜・花き研究G 澤崎光希

昨年までの結果では、土壌が基準水分値まで乾燥した場合に灌水を実施することで夏期の生育停滞を回避し収量が向上する可能性が示唆された。一方、葉鞘径が太く 1 本あたりの重量が大きい株で褐色腐敗病の発病が多く、また特に 9 月収穫時に発病が多くなる傾向がみられた。ただし、播種粒数を増やして栽植密度を高めることで葉鞘径の太りを調整することで発病株率(収穫本数のうち褐色腐敗病斑がある株の本数の割合)が低下する傾向もみられた。

令和7年度は、効率的な灌水技術の確立および耕種的な褐色腐敗病抑制技術の確立を目指し試験を実施した。

灌水回数を削減し、省力化を図るため保水資材施用による土壌の保水機能向上を目指し試験を実施した。保水資材を定植時に植溝施用し、施用量は3水準(1.0kg/10a(カタログ基準)、3.0kg/10a、無施用)とした。圃場での栽培期間中、いずれの施用量でも根盤付近の土壌水分値の推移に大きな差はなかったため、定点では土壌の保水機能向上効果は認められず、灌

水回数削減には至らなかった。

播種粒数の調整による褐色腐敗病の発病株率軽減効果について再現性を確認するため試験を実施した。チェーンポット(cp303)を使用する場合には、播種粒数を2粒から2.5粒もしくは3粒に増やし、密度を高めることで葉鞘径の肥大が最大約3～4mm程度抑制された。葉鞘径が細く推移したことで、特に9月の褐色腐敗病多発時の収穫本数に占める褐色腐敗病斑のある株の割合が低下した。これは灌水の有無にかかわらず、また、“夏扇パワー”“大地の響き”の両品種とも同様の傾向であった。この結果は令和6年度と同様であり、2ヵ年続けて効果が実証されたため実用化技術として取りまとめた。

ただし、今年度は灌水による収量向上については効果が見込めない結果となった。

(4)予備試験

ア 大規模施設園芸ミディトマトにおける超多収・安定生産技術の開発

園芸研究センター スマート園芸研究G 坂本浩 藤田雄大 山形淳平

湛液噴霧耕栽培における、県内の主力品種であるミディトマト‘華小町’の摘果の有無が、草勢維持と収量に及ぼす影響を検討した。摘果区では、着果確認後に8～9個/果房残した。摘果は果実径が10mm以下で行った。摘果の効果は、10月～12月の茎径が大きくなる傾向が見られ、増収傾向がみられた。可販果実の平均糖度には若干の向上が見られ有意差が認められた。台木の効果は、‘フォルタミーノ’、‘アーノルド’、‘カルディア’の3種に‘華小町’腋芽を接ぎ木した。栽培方式はヤンマー方式で令和7年3月まで栽培した。3種の台木中、‘フォルタミーノ’がもっとも草勢が強かった。スプレーポニック方式で栽培した結果、‘フォルタミーノ’接ぎ木区は乱形果が多発した。

温風暖房機の送風ダクトの、異なる噴出口からの距離における風速を測定した。その結果、噴出口から0cmにおいては子ダクトの設置位置によって風速が変化した。しかし、噴出口から50cm、100cmにおいては、噴出口から遠くなるにしたがって風速が低下した。得られた結果を、次年度の送風ダクトおよび群落蒸散を利用した試験に活用する。

イ ブドウ「福井 GR1 号」の果房改善技術の検討

品種開発研究部 園芸育種研究G 坂川和也

ブドウ‘福井 GR1 号’について花穂整形時期の違いが房型に及ぼす影響と、果実袋の種類が果実着色に及ぼす影響を検討した。房型に大きく影響する房の上部支梗の長さは、花穂整形の時期による影響は判然としなかった。一方、花穂整形時に上部支梗の形状はある程度判断が可能であり、花穂整形時に良好な房型のものを使用する事が効果的と考えられた。果実袋の種類によって、直光着色品種である‘クイーンニーナ’等では果実着色の影響が見られたが、‘福井 GR1 号’の着色は変化が少なく、‘福井 GR1 号’は直接光が当たらない状態でも良好に着色する散光着色品種であると考えられた。

ウ イチゴ新品種の電照効果の検討

品種開発研究部 園芸育種研究G 林恵美子

イチゴでは一般的にCO₂施用により光合成が促進され、収量が向上することが期待されている。しかし、令和5年・6年の試験において、新品種‘福井 ST1 号’‘福井 ST2 号’では、CO₂施用区の収量が無施用区よりも低下する現象が確認された。そこで本試験では、イチゴの光合成促進に効果があるとされるLED電球による長日補光(電照)処理を併用することで、CO₂施用による減収を改善できるかを検討した。電照にはアスター株式会社製イチゴ用白色LED電球を使用し、電球は約2m間隔でイチゴ苗から約1mの高さに設置した。補光処理は11月～3月末まで、6～18時の12時間で実施した。

その結果、CO₂施用区では福井 ST1 号・福井 ST2 号のいずれにおいても、無施用区に比べて1株当たり収量、果数、平均果重が減少した。開花開始時期、草丈、葉数、葉柄長、小葉身長、葉幅、葉色については、2月末時点では区間差は認められなかった。以上より、補光処理を併用しても、CO₂施用による減収傾向は改善されず、光環境の改善だけでは減収要因を十分に補えない可能性が示唆された。

エ 新規導入果樹の品種比較

園芸研究センター ウメ・果樹研究G 神田美奈子・田中裕介

当県に適する新規果樹として、ナッツ類およびカンキツ類について品目や品種を検討した。ナッツ類は、他県の情報を収集、検討し、ヘーゼルナッツを選定した。品種を検討した結果、‘アメリカン’、‘サカジャウエア’、‘ジェファーン’、‘ルイスパーガー’、‘ハレンジャーゼン’を選定し、ほ場に定植した。

カンキツ類は、現地でのレモン品種および振興状況を聞き取りした結果、香酸柑橘類としてレモン(品種‘リスボン’、‘マイヤー’、‘璃の香’、‘ピラフランカ’、‘クックユーレカ’)、すだちを選定した。ミカン類は年内に収穫できる‘みはや’、‘津之望’、‘べにばえ’を選定し、それぞれポットに定植した。

また、ミカン類の栽培方法を検討するために、センター内で栽培されている12年生ウンシュウミカン‘宮川早生’の畝なし区、根域制限(防根シート+高畝)区の果実糖度を調査した。その結果、根域制限区で糖度が高くなり、水田転換園等でも根域制限栽培を行うことで、果実糖度が高められる可能性があると考えられた。

(5)電化協会委託試験

ア ミディトマト‘華小町’挿し穂の冷蔵貯蔵法の開発

園芸研究センター スマート園芸研究G 坂本浩・藤田雄大

ミディトマト‘華小町’は栄養繁殖系であるため、育苗には挿し穂を大量に必要とする。採穂用親株の確保と管理には広い栽培スペースが必要となるが、挿し穂の貯蔵が可能となれば、採穂親株の管理スペースの縮小が可能になる。そのため挿し穂貯蔵温度および鮮度保持フィルム包装の効果を試験した。

市販のポリエチレン袋を用いて、5～9℃下で14日の冷蔵貯蔵を行った場合では、茎葉に障害が発生し、ほとんどの挿し穂で挿し芽ができなかった。11℃貯蔵区の挿し芽が供試した試験区の温度では発根が多かったが、約4割の発根率であり、

実用性に乏しかった。

ポリエチレン袋での貯蔵は困難であったが、鮮度保持フィルムの「PY9T7」で9℃・14日間貯蔵した穂は約7割発根した。ポリエチレン袋で挿し穂貯蔵ができない貯蔵条件下でも、鮮度保持フィルム袋で可能な条件があることがわかった。

葉菜類に向けた鮮度保持フィルムを用いた場合、市販のポリエチレン袋では二酸化炭素濃度は高く、鮮度保持袋では概ね根穂数を示した。「VY712」、「LY6K9」の11℃区で苗の活着率が72、78%と良好な値を示したが、無貯蔵の挿し穂の活着率よりは劣った。

貯蔵挿し穂を挿し芽して育苗した苗の定植後の生育は、「VY712」の11℃区育が優れた。全収量は、9℃貯蔵と11℃貯蔵を比較した場合、11℃区が高い傾向が認められた。全体の糖度は全ての区で7.7度以上と高かった特に「PY9T7」の11℃区が8.4度と高かった。可販果の平均糖度は、7.3～7.6度と差は認められなかった。

(6)その他事業

ア 病害虫発生予察事業(国・県)(S25年度～)

病害虫防除室

(ア)水稲病害虫

本年の作況単収指数は103の「やや良」(10/25現在)、上位等級比率は「ハナエチゼン」が約91%、「コシヒカリ」が約88%であった(11/25現在)。「いちほまれ」は、約2,200haで栽培された。水稲栽培における直播面積は約2,800haと前年より約63ha増加した。ほとんどが直播湛水土壤中播種である。

水稲の福井県特別栽培農産物認証面積は、約1,167haで前年より約25ha減少した。

【苗立枯病・細菌性苗病害(少)】育苗期間中の温度管理や水管理の不備によるものと思われるムレ苗やカビ類が散見された。細菌性病害ではもみ枯細菌病がやや多い発生であった。

【葉いもち(多)】6月5半旬に奥越の常発地で初発、7月1半旬に坂井・丹南でも発生が見られ、全域発生開始は平年並みだった。

BLASTAM感染好適条件は、6月11日に3地点、15～17日に5地点/9地点中で出現したが、それ以降は出現せず、平年より回数も少なかった。

7月中旬以降、わずかな発生の圃場が多かった一方、発生の多かった圃場でずり込みは無いものの上位葉への進展が見られた。6月中下旬以降気温が高く推移した一方で、稲の茎数増加がやや遅く推移し、軟弱徒長気味な稲や葉色が濃い中晩生品種を中心に感染が拡大したと推察される。

【穂いもち(早生、中晩生ともに少)】初発は、早生、中生ともに平年並みの8月1半旬、8月3半旬であった。BLASTAM感染好適条件は、8月13日に奥越2地点のみで出現した。

8月は気温が高く降水量がやや多かったが、穂いもちの進展には適しておらず、早生・中晩生ともに平前年より少ない発生であった。

【紋枯病(少)】6月の気温がかなり高く、降水量もやや多く、初発は平年並みの7月1半旬であった。

7月5半旬には、全域で発生していたが、早生を中心に茎数増加がやや遅く推移し、降水量もかなり少なかったことで、発生面積はかなり少なかった。8月中旬も発生面積は少なかったが、局所的な上位葉鞘への垂直進展が認められた。8月の降水量が多く水平垂直ともに進展したが、9月上旬(中晩生)の発生、被害面積はともに平前年より少ない発生となった。

【ごま葉枯病(やや多)】8月中旬以降に福井、坂井、嶺南で軽度の発生が見られ、9月上旬(中晩生)は全域に発生し坂井、丹南での発生が多かった。7月までの高温少雨により肥切れが誘発されたことに加え、8月の降水量が多く感染に好適であったと考えられる。

【イネミズゾウムシ(多)】本田侵入初期が5月3半旬と平年よりやや早く、田植直後から発生が見られ、5月下旬に発生のピークとなったが、嶺北平野部では6月下旬にピークが見られた。奥越、丹南で特に発生が多かった。

前年の発生が多く積雪日数は平年並みであったが、4～5月の気温が高く本田侵入や成育に好適であったことが平年より多かった要因と考えられる。

【ニカメイチュウ(第1世代幼虫 やや多、第2世代幼虫 やや少)】越冬世代成虫は、フェロモントラップの誘殺最盛期が平年より早い5月4半旬で6月1半旬にも小さなピークが見られるややだらついた発生であったが、平年より少なかった。予察灯(福井)は5月5半旬にピークが見られた。

第1世代幼虫の加害初期は5月6半旬で、最盛期は6月3半旬となり平年より早かった。春先から気温が高く成育が早まり、越冬幼虫の成育に好適であったと考えられる。第1世代成虫の発生は少なかったが7月2半旬がフェロモントラップの誘殺最盛期であった。

第2世代幼虫の発生は少なく、地域により多く見られたが被害は少なかった。6月下旬～7月の気温が高く、猛暑日が20日あったことや降水量も少なく、幼虫の発育や卵のふ化等へ悪影響を及ぼしたためと考えられる。

【斑点米カメムシ類(やや多)】本田侵入初期は6月4半旬で、加害盛期は早生7月4半旬(平年よりやや早い)、中晩生8月2半旬(早い)であった。

7月上旬の水田周辺雑草地・水田内での生息密度が、平前年より多く7月9日に注意報を発表。

早生品種出穂期における水田内生息密度は平年並み、主にカシカメムシ類、クモヘリカメムシの発生であった。イネカメムシも一部地域で確認されたが少なかった。その後、本田内での主要種がホソハリカメムシ等に変更、圃場間差は大きい9月上旬(中晩生)まで生息密度は多く推移した。

斑点米による格落ちは、早生で多いが前年より少なく(ハナエチゼンで約40%)、前年同様に中晩生品種でも目立ち(コシヒカリで約43%)、地域により格落ちの主要因となったが、前年よりは少なかった。

【ウンカ類(少～やや多)】セジロウンカは7月上旬から、ヒメトビウンカは6月中旬から発生が見られ始め、すくい取り虫数は、セジロウンカは少なかったが、ヒメトビウンカはやや多かった。トビイロウンカの飛来は観察されなかった。

その他、イネゾウムシ、イナゴ類の発生は多く、白葉枯病、稲こうじ病、イネハモグリバエ、イネヒメハモグリバエ、イネドロオイムシ、ツマグロヨコバイ、イネツトムシ、イネアオムシ、イネクロカメムシ、ササキリ類、コブノメイガの発

生は少なかった。

(イ)大麦・大豆・ソバの病害虫

【大麦】出穂期は、平坦部で4月中旬頃、山間部で5月上旬頃と平年より遅かった。開花期頃である4月5半旬は、湿度が高い日もあったが気温は低く、5月中下旬も降水量が並み～少なく推移したため、赤かび病は僅かに見られる程度で平年並みであった。実質的な被害はなかった。

雪腐病は、冬期間の積雪日数が多かった奥越地区で発生が見られたが、少発生であった。裸黒穂病が福井、坂井の一部で発生し、近隣に採種圃は無く影響は限定的であったが、指導者間で情報共有し、種子更新および種子消毒の徹底を呼びかけた。また、近年発生の少なかった雲形病が一部で発生した。

【大豆】作付品種は、「里のほほえみ」がほとんどで、「エンレイ」が一部で栽培されている。

葉焼病は、7月中旬から初発を確認したが発生量は少なく、9月に入り急速に広がった。被害は発生時期が遅かったため限定的であった。

フタスジヒメハムシは6月中旬から見られ成熟期まで発生が続き、発生量は多かった。7月以降ツメクサガやハスモンヨトウ等の鱗翅目害虫による加害が増え、局地的に多かった一方で、ウコンノメイガは、全体に少発生であった。カメムシ類は早くから圃場内への侵入が確認され多発した。ハダニの発生は福井を中心に発生が多く、平年並みであった。

【ソバ】昨年問題となったハスモンヨトウによる甚大な被害は、今年度はほぼ見られなかった。一部の地域ではアブラムシやうどんこ病の発生もみられた。

(ウ)野菜・果樹・花きの病害虫

【野菜】スイカの炭疽病は、丹南で6月に発生したが、少発生であった。つる枯病の発生は平年より少なかった。アブラムシ類、ハダニ類は6月から発生が見られたが少なかった。果実汚斑細菌病は、発生が確認されなかった。

トマトの灰色かび病は、半促成栽培で5月上旬頃から発生し、各地で見られたが少発生であった。葉かび病は長期どり栽培で春先から発生し一部多発したが、秋は少発生となった。すすかび病も春先から発生が見られたが、秋にかけて発生が続き、多発圃場も見られた。青枯病は常発地を中心に局中発で、かいよう病の発生も一部でみられた。トマトキバガは、発生域が拡大し、多発圃場では上位葉や果実の被害により、収量への影響もあった。コナジラミ類は各地で見られ、一部多発したほか、トマトサビダニの発生も目立った。

キュウリのべと病は、半促成栽培で見られたが発生は少なかった。うどんこ病は、半促成栽培の一部で多かった。灰色かび病は、梅雨に一部発生したが少発であった。その他コナジラミ類、ハダニ類が局所的に多く、目立った。

ネギのさび病は少発生であったが、高温により、白絹病、萎凋病、軟腐病などの土壌病害が多発した他、シロイチモジヨトウやハスモンヨトウ、アザミウマ類、ハモグリバエ類なども全体に発生が多かった。

アブラナ科野菜では、5月上旬にフェロモントラップへの誘殺が急増し、コナガの注意報を5月14日に発表したが、初夏どりのブロッコリーやキャベツの一部での発生に留まった。秋冬どりではハイマダラノメイガ、ハスモンヨトウ、オオタバコガの発生が多かった。

ラッキョウのさび病も少発生であったが、アザミウマ類が昨年に比べ目立ち、灰色かび病、ハモグリバエ類の発生は昨年並みであった。

【果樹】ウメの黒星病は、5月中旬～6月中旬の気温が好適であったが、降水量が少なく適期防除が行われ、平年並みの発生となった。かいよう病は、4月中旬の降雷に加え、5月上旬に強風の日があり、平年よりやや多かった。灰色かび病は、初発は平年よりやや早い3月下旬であったが、開花盛期から終期までの期間が6日と短く、やや少ない発生であった。ウメシロカイガラムシ第1世代の初発は4月5半旬で、平年より2週間ほど早かったが、前年第3世代の発生量が少なく適期防除が行われ、少発生であった。コスカシバは、老木や被害を受けやすい品種が増加傾向で、越冬幼虫の活動時期が早まったが、平年並みの発生であった。モンクロシャチホコは夏期高温により発生が抑制され、発生はやや少なかった。ウメ輪紋ウイルスは、発生が確認されなかった。

ナシの黒星病は、春先から平年に比べ少なく、夏季も気温が高く栽培期間を通じて少なかった。また、昨年問題となったカメムシ類や吸汁ヤガ類による吸汁被害は、平年並みで、高温少雨の影響により、ハダニ類やシンクイムシの発生が見られた。火傷病、コドリリングは、確認されなかった。

カキのカメムシ類もナシ同様に前年より少なく平年並みであった。ヨトウムシ類や炭疽病も一部で見られた。

ブドウは、黒とう病の発生が一部で見られたが少なく、うどんこ病の発生も見られた。高温少雨の影響によりハダニ類やスズメガ、アザミウマ類の発生が見られた。

【花き】キクの白さび病は、春植えでの発生は少なかった。期間を通じて、黒斑病の発生がわずかに見られ、褐斑病も見られた。アザミウマ類など微小害虫やカメムシ類等は高温の影響により発生が見られた。

【その他】新たに発生が確認された病害虫 特になし

イ 病害虫防除所運営事業(国庫)(S26年度～)

病害虫防除室

病害虫発生予察の精度を高め、効率的な防除を推進するために、40名の病害虫防除員を設置し、いもち病、紋枯病、斑点米カメムシ類の発生状況調査を行った。病害虫発生状況調査を基に、病害虫発生予察情報を発表し、防除指導を行った。また、農薬販売業者について指導、取締りを行った。

ウ 農業抵抗性検定事業(国・県)(S52年度～)

(ア)トマト葉かび病の耐性菌検定

次世代技術研究部 生産環境研究G 北島義訓

県内圃場から採集したトマト葉かび病菌について、薬剤添加培地上で感受性検定を行った。ゲッター水和剤、ファンタ

ジスタ顆粒水和剤、パレード20フロアブルについて調査を行った。

(イ)イネウンカ類の薬剤感受性検定

次世代技術研究部 生産環境研究G 小島孝夫

コナガは抵抗性が発達しやすく、監視を継続していく必要がある。新規の薬剤であるジアミドの感受性の低下が、2014年頃から鹿児島、茨城、千葉で報告されている。飛来源の一部である中国では、2012年の時点で近年導入されたクロラントラニプロロールについては中国北部では抵抗性は発達していないが、南部では抵抗性が増加している。効果的な薬剤による防除体系を構築するためには、ジアミド系を含む各種薬剤の殺虫効果を把握する必要がある。

県内各地で採集調査を実施したが、コナガの発生が少なく、過去（30年前）の発生密度は4頭/株みられたが、本年は1頭以下/株または発生を認めなかった。辛うじて1か所（坂井市鳴鹿産）を飼育・増殖に成功した。葉片浸漬法により、25℃、16L8Dで飼育して3日後、5日後、7日後に生死を判定して死虫率を算出した。感受性系統として累代飼育されているコナガについても同様に試験した。なお、苦悶虫は死虫数として計数した。試験は3反復で行い、対照として水道水、展着剤を処理した区を設けた。

遅効的なクロルフルアズロン以外の薬剤は、高くて速い殺虫効果を示した。全国的に抵抗性が問題となっている系統名ジアミド（一般名クロラントラニプロロール、商品名プレバソン）の抵抗性は、発達していない結果となった。

エ 減農薬防除体系実証事業(国・県)(R4年度～R7年度)

次世代技術研究部 生産環境研究G 坂本圭

ネギの定植時に登録のある薬剤を比較し、白ネギの初期防除の削減を目指した省力的な技術を検討した結果、クロラントラニプロロール・チアメトキサム水和剤の防除効果および持続性が最も高かった。アセタミプリド・シアントラニプロロール粒剤とアセタミプリド粒剤の防除効果については、生育初期において程度はやや低いながらも防除効果が認められたが、処理後35日以降は防除効果が低減する傾向があった。

大麦とハゼリソウを用いて白ネギにおいてリビングマルチの効果を検討した結果、雑草との競合によりリビングマルチの生育が悪く、効果が判然としなかったため、雑草対策も考慮する必要があると考えられる。

オ 重要病害虫等侵入警戒調査事業(国・県)H26年度～

病害虫防除室

(ア)コドリガ

令和6年5月から10月までの期間、福井市寮町農業試験場内ナシ園近くにフェロモントラップを設置し調査を行ったが、本虫は確認されなかった。

(イ)トマトキバガ

令和7年4月から11月に福井市寮町農業試験場内および美浜町の園芸研究センター、あわら市の園芸カレッジおよび福井市下市町の各トマトハウス近くにフェロモントラップを設置し、調査を行った。

圃場での発生が拡大し、発生圃場と未発生圃場の誘殺数にかなり差が見られ、特に発生の多い圃場では6月中旬～8月にかけ断続的な誘殺が認められた。更に抑制トマト定植後も緩やかに減少したものの断続的に誘殺された。

(ウ)火傷病

令和7年4月から11月までの期間、農業試験場内ナシ圃場において見取り調査を行った結果、調査期間中に火傷病は確認されなかった。

(エ)スイカ果実汚斑細菌病

令和7年4月から8月までの期間、越前市のスイカ栽培圃場において茎葉および果実の発病調査を行った結果、調査期間中に果実汚斑細菌病は確認されなかった。

(オ)ウメ輪紋ウイルス

令和7年6月4日～5日に、あわら市、小浜市、若狭町のウメ生産園地および苗生産園地において目視による葉の病徴の有無を調査した結果、輪紋症状は確認されなかった。また、採取した葉を名古屋植物防疫所がイムノクロマト法等による検定を行った結果、陰性が確認された。

(カ)イネミイラ穂病菌等その他国内未発生のイネの病害虫

令和7年5月から9月までの期間、農業試験場内予察田、坂井市現地圃場において調査を行った結果、各病徴は確認されなかった。

カ 土壤保全対策費(土壌環境基礎調査事業)(S54年度～)

次世代技術研究部 みどり戦略推進研究G 吉川侑沙・西端善丸

(ア)土壌機能実態モニタリング調査事業

農地25地点の土壌の断面調査および化学性・物理性の分析、アンケート調査を実施し、土壌診断および土づくり対策の基礎試料の作成を行った。

(イ)基準点調査事業

場内水田圃場に化学肥料単用区、無窒素区、有機物施用区、総合改善区を設けていちほまれを栽培し、稲わらの連用が土壌と水稻の生育に及ぼす影響を調査した。また、畑ライシメーターで①：秋冬キャベツ栽培前の緑肥（ヘイオーツ）の効果について（6年目、品種：おきなSP）、②：越冬型緑肥であるヘアリーベッチ：まめ助について調査・分析を行った。

その結果、①：緑肥の収量は4/10、5/1播種でDWで0.7 t/10 a、0.8 t/10 aで、R2～R6と比較してDWが最も多かった。また、キャベツの収量は4/10緑肥播種区で、5.9/10 a、5/1播種区で6.0 t、無緑肥区で同5.7 tと、無緑肥区で収量がやや低かった。②1度目の積雪の際に約半数が枯死し、2度目の積雪により全株が枯死した。

農地土壌炭素貯留等基礎調査事業として県内農地10地点（水田9、施設1）および場内基準点調査水田圃場2地点（化学肥料単用区、有機物施用区）の0～30cmの土壌（作土層、第二層）を採取し、土壌炭素貯留量等を分析するとともに、現地圃場の農地管理実態アンケート調査を実施、まとめ、併せて報告書等を作成して農業環境技術研究所に報告した。

地力調査事業として、農地土壌炭素貯留等基礎調査事業の同地点の土壌の物理性および化学性の分析を行い農業環境技術研究所に報告した。

キ 肥料検査登録事業（S51年度～）

次世代技術研究部 みどり戦略推進研究G 吉川侑沙

肥料の品質の確保等に関する法律に基づき、特殊肥料1点（牛糞堆肥1点）について、収去および成分分析を実施した。

ク 奨励品種決定調査事業(S39年度～)

(ア)水稲

品種開発研究部 作物研究G 井上健一

本県に適する水稲品種選定のための調査を実施した。予備調査として、早生で2系統、中生で2系統、中晩生で2系統を供試した。早生では収量品質が良好な「越南315号」を有望評価し、中生では極めて多収の「越南317号」をやや有望と評価した。晩生では有望、やや有望と評価される系統はなかった。有望、やや有望系統を中心に収量構成要素を解析した。成績については、関係機関、関係各課に提出のうえ、奨励品種の改廃、次年度以降の調査計画に活用する。

(イ)麦類

品種開発研究部 作物研究G 井上健一

本県に適する大麦・小麦品種選定のための調査を実施した。

予備調査として、粳性六条大麦2系統、糯性六条大麦1系統、醸造用大麦2品種1系統、小麦2品種2系統を供試した。粳性六条大麦では、倒伏に強く多収で硝子粒率が低い「北陸皮79号」を、糯性六条大麦では、倒伏に強く多収の「北陸皮糯81号」をそれぞれやや有望と評価した。醸造用大麦では、多収で大粒な「ゆきはな六条」と「こはく雪」をやや有望と評価したが、実需のニーズがなくなったため次年度調査は打ち切りとした。

小麦では、生育収量が安定した、「夏黄金」、「ゆめちから」をやや有望と評価した。

成績については、関係機関、関係各課に提出のうえ、奨励品種の改廃、次年度以降の調査計画に活用する。

（六条大麦に関しては「食用大麦品種プロジェクト」〔農研機構、R7～11〕で実施）

(ウ)大豆

品種開発研究部 作物研究G 井上健一

本県に適する大豆品種選定のための調査を実施した。予備調査として、2品種9系統を供試した。

熟期が早く収量性が極めて高い「そらびき」をやや有望と評価した。本年は各品種・系統ともに生育過剰気味であったため、引き続き生育の安定性について検討する。

成績については、関係機関、関係各課に提出のうえ、奨励品種の改廃、次年度以降の調査計画に活用する。

ケ 原原種・原種ほ設置事業(S38年度～)

品種開発研究部 作物研究G 吉川嘉一

水稲・麦類・大豆の原種等を生産し、系統維持のための採種をした。原種等の生産実績は、水稲が9品種で原種等12,781kg、大麦ファイバースノウが原原種等285kg等であった。

コ 優良種子生産体制確立(S38年度～)

品種開発研究部 作物研究G 吉川嘉一

水稲・麦類・大豆の優良種子生産のため、系統栽培では品種特性を確認しながら選抜を行った。生育期間においては異株や雑草を除去し、収穫後は未熟種子や病害汚染種子等を除去し、健全種子の確保に努めた。また、発芽率を調べ、水稲原種および麦類原種はどの品種も90%以上、大豆は80%以上となり、農産物検査基準および県種子審査基準を満たしていることを確認した。

サ 水稲生育指標調査(S45年度～)

品種開発研究部 作物研究G 竹内早希子

5月2日（連休）移植のハナエチゼン、コシヒカリ、あきさかり、いちほまれおよび5月20日（適期）移植のコシヒカリ、あきさかり、いちほまれについて、生育・収量・品質の本年の気象に対する反応を追跡した。

本年の気象は、4月は中旬が高温多日射となったが、その後低温から平年並みの気温で推移して苗の伸長には大きな問題はなかった。5月は中旬に高温多日射となったのち、5月22日には平年より19日早く梅雨入り、6月上旬までは断続的に降雨があり日射量も少なくなった。6月中旬からは再度高温多日射となり、7月上旬から下旬頃まではさらに降水量も少なく推移した。8月中旬から9月中旬までは高温多日射、9月中下旬は高温で推移した。降水量は7月が平年比10%と極端に少なくなったが、8月は平年比108%となった。

草丈は適期植えで当初は短めだったが6月以降やや長めとなった。生育初期の茎数は、連休植えは非常に多く、適期植えは非常に少なくなったが、生育がすすむにつれていずれも平年並み～やや多い程度となった。適期植えは幼穂形成期は連休植えで1～5日早く、適期植えで平年並み～3日遅くなった。出穂期は連休植えで7～3日早く、適期上ではほぼ平年並みとなった。成熟期は全品種平年より1～9日程度早まっており、特にハナエチゼンで全ての生育ステージが早まっていた。収量は適期いちほまれを除き平年より多収となった。適期いちほまれ以外は穂数が多くなったが、粒数は平年並み～やや多

い程度で、登熟歩合、千粒重が極端に低くなることは無かった。適期いちまはれは6月下旬から分けつ過多で弱い分けつが多く発生し有効茎歩合が低下、穂数や籾数、収量は平年並みとなった。倒伏は全体に多かった。玄米タンパク含量はハナエチゼン、連休コシヒカリはやや高く、それ以外の品種は平年並み～やや低くなった。玄米品質は、ハナエチゼン以外において、高温の影響が著しかった前年より整粒率は向上、未熟粒率は減少と改善傾向であったが、平年よりは悪くなった。

シ 主要農作物等優良品種育成事業（県）(R2年度～)

(ア) 遺伝資源の収集及び評価

品種開発研究部 水稲育種研究G 巻田恵理奈

国内外から収集した遺伝資源186品種・系統を栽培し、有望なものは交配に利用した。出穂期、草型、玄米品質、穂発芽性等の主要な栽培特性を評価した。また収穫した種子を保存した。

ラオスの在来稲品種16品種を供試し、日本の稲品種ではあまり見られない、育種素材として有望な形質の探索を行った。登熟期は晩生～極晩生であり、稈長は日本の稲品種よりも高い傾向にあった。収量は全体的に低収から極低収であった。福井県においての栽培では、ラオス稲は全体的に不稔が多く、脱粒性を有していた。いもち抵抗性は今回調査したすべてのラオスの稲品種で圃場抵抗性または真性抵抗性が確認された。根数を計測したところ、深根性の高い（深根率が90%以上）品種は8品種確認した。また、達観の簡易的な耐乾性調査で耐乾性が強いとされた品種を3品種選定した。圃場観察でラオス稲が日本の稲より早い時間に開花する傾向が見られたため、8:30～10:30まで30分ごとに開花数を数えたところ、今回調査したラオス稲9品種すべて早朝開花性を有していることが確認された。これらのラオス稲品種が持つ優れた遺伝形質を福井県の水稲に取り入れるため、栽培特性の優れた品種との交配を行い、選抜を進めている。

(イ) 福井県産ミディトマトを支える新品種の育成

品種開発研究部 園芸育種研究G 阿部浩己

【単為結果性品種の育成】R6年度まで戻し交配を行っていた、単為結果性遺伝子を導入したミディトマト6系統のF1種子を作製した。また、R6年度に作成した単為結果性ミディトマト12系統のF1種子を、土耕の半促成と抑制で栽培した。1回目の選抜により、12系統から3系統へ絞り込んだ。R7年度に作成した6系統については3/23に定植し、1回目の選抜を進めている。

【高温耐性品種の育成】R6年度に収集した高温に強いとされる市販トマト15品種を栽培し、特性を評価した。可販果率、障害果率、糖度といった通常の評価基準に加え、着果率や裂果、軟化、着色不良といった高温が原因の1つに挙げられる障害を評価の対象とした。15品種から特に有望と評価した2品種を交配父本として選定した。また、交配母本とする農試保有良食味ミディトマト2系統を選定した。これら4品種・系統を2/27に定植し、交配・採種を進めている。

(ウ) 無加温で盆前出荷できるブドウ早生新品種の育成

品種開発研究部 園芸育種研究G 坂川和也

令和6年度交配種子の播種により181本の苗を得たほか、有望母本から1,912粒の実生種子を採取した。重イオンビーム照射による変異創出試験では、病害が発生しやすい完全露地条件で栽培した苗木181本（前年度に休眠枝に重イオンビームを照射し挿し木により得られた苗を定植）を切り戻した後の2年目の発育を確認した。全ての個体が発芽せずに枯死し、病害抵抗性を持つ変異個体の獲得には至らなかった。枯死の主たる原因は前年度に激発した黒とう病による貯蔵養分不足と考えられた。

(エ) 麦の収穫時期予測

次世代技術研究部 スマート農業研究G 山口泰弘

福井市寮町の圃場で出穂後20日から2～3日おきに10時前後にP4Mで撮影を行った。また衛星画像は5月2日から5月21日にかけて不定期に5回撮影した。これまで3年間の結果から、衛星から得られるNDVI値は0.3～0.7の範囲、大麦水分約40%～70%の範囲であれば、大麦水分が予測可能であることがわかった。実際の大麦刈り取り開始時は水分が30%以下となった時期となるため、40%以下となった日から毎日2.1～3.2%の割合で水分が低下するものとして刈り取り開始日を計算することが可能である。

ス マット苗仕様両正条田植え機の実用化モデル開発および直交機械除草を核とする水稲有機栽培の実証

(クラスター事業)(R7年度～R8年度)

次世代技術研究部 スマート農業研究G 山口泰弘

あわら市で両正条田植え機を用いて37株植えと60株植えで有機栽培を行い、ウィードマンに自動操舵システムを付けて除草効果と収量性について検討した。今年は主に気象的要因による両区ともに倒伏し、十分な収量を確保することはできなかったが、目標としていた穂数や除草効果については達成できた。一方、両正条田植え機の横の揃いが悪く、原因不明（太陽フレア？）されたが、欠株や残草、収量への影響は大きかった。

3. 普及指導業務実績

(1) 農業経営発展支援

ア リーディングファームの育成

リーディングファーム育成のため、経営発展を目指す経営体の資質向上と経営発展に向けた「リーディングファーム育成プロジェクト」農業経営塾を実施し、受講者14経営体の中期経営計画策定を支援した。また、令和6年度「リーディングファーム育成プロジェクト」農業経営塾において経営計画を策定した16経営体に対して、年度計画を具体化し、課題解決にかかる専門家派遣や新規取り組みの事業支援、担当講師を交えた実績検討・次期取組協議を通じ、経営計画の着実な実行を支

援した。

(ア)オープンセミナー「未来を描く福井の農業セミナー」

地域農業を牽引する先進的農業経営体等を講師とした経営改善・人材育成の取組に関する研修を通じ、経営発展に向けた意識啓発を図るとともに、プロジェクト受講者の募集を行った。

日時：令和7年6月23日(月) 場所：サンドーム福井小ホール

講演1：「カッコいい農業」で実現する未来志向の農業経営

～女性や若者が輝く魅力的な職場づくりと地域を巻き込む担い手連携戦略～

講師：ロックファーム京都(株) 代表取締役 村田 翔一 氏

講演2：農業情勢の展望と、未来を切り拓く経営者像

～統計データを用いた「将来推計」と「労働環境の他産業比較」～

講師：(株)三菱総合研究所 武川 翼 氏

情報提供：福井県事業承継・引継ぎ支援センターの取り組みについて

講師：福井県事業承継・引継ぎ支援センター 佐藤 さとる 氏

参加者：指導・青年農業士、農業法人等の経営体、関係機関等 69名

(イ)農業経営塾

専門家で構成する支援チームによる複数回の集合研修を通じ、14経営体の中期経営計画策定を支援した。

開講式 時期：令和7年8月7日(木) 場所：NOSAI 福井 大会議室

第1回 時期：令和7年10月30日(木) 場所：食品加工研究所 研修室

第2回 時期：令和7年11月13日(木) 場所：食品加工研究所 研修室

第3回 時期：令和7年12月4日(木) 場所：食品加工研究所 研修室

発表会 時期：令和8年3月5日(木) 場所：ハピリンホール

講師：中小企業診断士 津田 均 氏、中小企業診断士 松田 博史 氏、中小企業診断士 佐藤 さとる 氏、農業経営アドバイザー 中出 隆明 氏

(ウ)経営計画実行支援

課題解決にかかる専門家派遣：延べ15回

経営発展チャレンジプラン支援事業採択経営体数：4経営体

担当講師派遣：中小企業診断士 津田 均 氏、中小企業診断士 松田 博史 氏、中小企業診断士 佐藤 さとる 氏 延べ16回

(エ)経営発展に向けた組織開発基礎研修

経営計画を着実に実行するため、専門家や他業種企業を講師とし、組織開発の理論や組織づくりの先行事例に関する研修を行い、経営目標達成に必要な組織体制の検討に向けた資質向上を図った。

日時：令和7年12月15日(月) 場所：福井県自治会館 201 研修室

講演：農業経営体における組織開発の進め方について

講師：(同)一荻 代表 中野 慧 氏

取組紹介・意見交換：テーマ 人材が集まり育つ組織づくりの取り組みについて

講師：(株)米五 代表取締役 多田 健太郎 氏

講義：経営計画の進捗管理の実践について

講師：(株)リテイルサポート 代表取締役 津田 均 氏

(株)ブイコンサルティング 代表取締役 松田 博史 氏

大吉経営事務所 代表 佐藤 さとる 氏

日本政策金融公庫福井支店農林水産事業 事業統轄 中出 隆明 氏

参加者：プロジェクト受講者、関係機関等 61名

イ 関係組織連携による経営体の発展支援

県が設置する「農業経営・就農支援センター」機能を活用し、専門家派遣による指導・助言により、経営体の経営改善や法人化、農業経営の円滑な継承等の課題解決を図った。

本センターの「農業経営支援計画検討会」は、5月から毎月、計11回開催し、79経営体が経営支援計画の認定を受け、中小企業診断士等専門家からのアドバイスを受けた。

ウ 集落営農救援隊による集落営農組織の経営支援

各地区JA・県・市町の連携により6地区・14集落が支援対象として選定された。県園芸振興課、JA福井県中央会と連携し、JA・県・市町合同の研修会や支援内容を普及交換する検討会のほか、対象組織を参集した意見交換会を開催した。

(ア)集落営農への支援にかかる検討会

a 日時：令和7年7月31日(木)

場所：NOSAI 福井

主催：JA福井県中央会、福井県 共催：JA福井県、JA越前たけふ

内容：各地区の支援計画にかかる検討会 参加者：各地区集落営農救援隊担当者 36名(JA13名、県19名、市町4名)

- b 日時：令和8年2月9日（月）
場所：JA福井県 鯖江中央支店
主催：JA福井県中央会、福井県 共催：JA福井県、JA越前たけふ
内容：各地区の支援実績にかかる検討会 参加者：各地区集落営農救援隊担当者等 32名（JA13名、県14名、市町5名）

(イ)支援者向け研修会

- a 日時：令和7年8月1日（金）
場所：NOSAI福井
主催：JA福井県中央会、福井県 共催：JA福井県、JA越前たけふ
内容：農家経営の分析・診断と改善提案について（TAC職員応用研修を活用して開催）
講師：JA全中 営農・担い手支援課 税理士 栗原賢陽氏
参加者：各地区集落営農救援隊担当者等 17名（JA6名、県8名、市町3名）
- b 日時：令和7年11月4日（火）
場所：JA福井県 鯖江中央支店
内容：地域における人材の掘り起こしについて 講師：大分大学経済学部 准教授 山浦陽一氏
参加者：各地区集落営農救援隊担当者等 41名（JA19名、県19名、市町3名）

(ウ)集落営農組織を参集した意見交換会

- a 日時：令和7年12月11日（木）
場所：福井県産業会館
主催：JA福井県、JA越前たけふ、JA福井県中央会、福井県
内容：各地区の救援対象組織の取組紹介および出席者意見交換等
講師：大味下生産組合（坂井市）、（農）塚原生産組合（大野市）
参加者：各地区集落営農救援隊担当者等 53名（農業者11名、JA18名、県17名、市町7名）
また、支援ツールや県内集落営農の取組事例をまとめた農業者向け意識啓発パンフレット「目指そう！持続可能な集落営農」を作成した他、令和6年度に発行した指導者向け資料「集落営農支援にかかる手引書」を改訂し、第2版を発行した。

エ 女性活躍支援

農業分野の女性のロールモデル発信および女性就農・就業を促進するため、各事務所の協力のもと、6事例をリーフレットにまとめた。

また、女性農業者の経営参画を促進するため、女性農業者の意見交換会を開催した。

(ア)ふくい農業女性の意見交換会

- 日時：令和7年12月8日（月）
場所：(株)ISEKI Japan 福井営業部（福井市）、平泉寺のパン屋さん（勝山市）、前田電気(株)（大野市）
バスで移動し、各3会場にて意見交換を実施
講師：〔福井会場〕 (株)ISEKI Japan 関西中部カンパニー 営業推進部 深谷 紗帆氏
〔勝山会場〕 福井県農業同組合中央会 審議監 大石 秀昭氏
(同)ファーム・スリー・ユー 執行役員 木村 恵氏
凧農園 安藤 陽子氏
滝本ふぁーむ 代表 滝本 和子氏
〔大野会場〕 前田電気(株) 代表取締役社長 前田 宏枝氏
参加者 県内の女性農業者、関係機関等 30名

(2)いちほまれ栽培技術の確立と普及

ア 栽培マニュアルに基づく生産指導

チーム会をとおして、各地区の稲リーダーと情報共有を図り、普及指導員の栽培指導を支援した。一昨年の記録的な猛暑を受けて、水田農業レベルアップ委員会にて作成された高温対策に準じて、早期の高温対策の周知や、早刈りによる早期の外観品質の確認など、例年より細やかな情報提供を行った。また、現地では、JA福井県と連携した「JAコネクト」アプリを活用し、細かな生産者への情報発信が実施された。その結果、普及指導員の適切な指導や生産者の適切な管理につながり、いちほまれの1等比率は95.9%と高品質を確保し、令和7年産の食味ランキングにおいては、「特A」評価を獲得した。

イ 増収に向けた追肥基準の策定

いちほまれは、コシヒカリに比べ、多収となりうる品種のポテンシャルを持つものの、生産現場では、思ったよりも収量が確保できない、との生産者の声がある。その対策として、各普及所では、追肥の量や時期を変更した調査研究等が実施されてきた。ただし、普及所ごとに、仮説や追肥の量・時期がばらついており、県統一的な見解が不足していた。よって、過去の調査結果等から、幼穂形成期の追肥が、増収と適正タンパク質含有率の維持に最も有効であるとの仮説を設け、県内事務所で統一した試験設計、調査項目を設定し、現地実証を実施した。

結果としては、籾数35,000粒/m²未満、幼穂形成期の葉色は4.0以下での窒素分2kg/10aの追肥が、収量向上・食味維持に効果的であるという基準を作成した。籾数35,000粒/m²という基準は、生産者が分からないと思われたため、過去の相関から、収量8.5俵/10aと表現できることを明らかにした。

単年度の結果ということで、マニュアルへ記載は見送られたが、さらに、来年度以降、知見および実績を積み重ねることで、マニュアルへの記載を目指したい。

(3)スマート農業および有機農業の普及拡大

ア 普及活動に活用できるスマート技術の体制整備

スマート農機やスマート技術を普及拡大していくにあたり、それらに対して、普及指導員が正しい知識をもつことが重要である。一方で、特に近年は、AI やリモートセンシング技術の急速な発展により、それらを活用したスマート技術の更新は目まぐるしいものがある。そのような技術の更新に、現場の普及指導員が取り残されないようにする必要があり、それらを正しく理解するためには、実際に使ってみることが一番の近道であると考えられた。よって、本年は、普及活動に活用できるスマート技術の体制整備を目標に、主に、水稻・雑穀担当の普及員に対する研修会の実施や、メーカーとの調整による体制整備を実施した。

(ア)スマート技術の普及員向け研修会の開催

下記の3回の研修会を実施した。単なる座学だけでなく、今後の使用を想定し、研修会場に行政端末PCを持ち込み、実際のソフトの仕様感を体験する構成とした。研修後のアンケート結果では、受講者の「概ね理解した」割合は、全研修100%を達成した。

5/30：KSAS（講師：(株)クボタ）、6/20：ザルビオ（講師：BASF ジャパン）、6/20：ドローンセンシング（講師：スマート農業研究G）

(イ)普及活動に活用できるスマート技術の体制整備

KASA およびザルビオについては、各メーカーと調整を実施し、普及員にアカウントを割り振ることや、生産者のアカウントとの連携を実施することで、県職員の行政端末PCで使用できる体制を整備した。

普及員を対象とした普及活動におけるスマート技術活用のアンケートの結果、半数以上が普及活動に活用した、と回答し、多くの普及員が、次年度以降も体制の維持を望んでいることが分かった。よって、この活動は有意義であると考えられた。課題として、どのように使ったらいいかわからない、という声もあったことから、何かしらの統一的な使い方を明示する必要があると考えられた。

イ 施設園芸でのスマート農業の加速

今年度新たに「高温対策技術解決チーム会」を構成し、ミディトマトで問題となっている軟化玉の発生要因解明と、高温対策に関するデータ活用型の指導技術向上に重点を置いて取り組んだ。近年、夏期の高温化に伴う品質低下が顕著となり、生産現場からは環境制御技術や高温対策の体系化を求める声が高まっていた。そのため、高温対策チーム会を軸に、環境計測データと生育データを組み合わせた分析に基づく指導体制づくりを進めた。

まず、4月から9月にかけて各産地で計測装置を活用し、温度・湿度・日射などの環境データと、軟化玉の発生状況を継続的に収集した。5月のチーム会では若狭地域のウィークリーレポート事例を共有し、普及指導員がデータを活用した振り返り手法を学ぶ機会となった。6月には株式会社ファームによる環境計測技術の研修を実施し、正しいセンサー設置や他産地の活用事例を学んだことで、普及員自身がデータを読み解き、現地指導に生かす基盤が整った。7月にはデルフィーセミナーを通じて高温対策の最新情報を提供した。

同時に、高温対策資材の効果検証を進め、特に外気導入装置（アウトサイダー）について、坂井地域で8～10月に試験を行った。9月の現地検討では、外気導入と細霧冷房を併用することで一定の冷却効果が得られることを確認した一方、外気温が35℃を超える条件下では効果が限定的であり、湿度管理を含む総合的な環境制御の必要性が明らかになった。軟化玉に関しては、福井・坂井地域の半促成作を対象に週1回の調査を実施し、発生ピークが7月に集中すること、要因が①つやなし果、②網入り果、③収穫遅れによる過熟、④選果時の衝撃、⑤高温による過熟の5つに整理できることを明らかにした。また、選果時の衝撃が軟化を誘発することが確認され、予冷車を活用した温度管理により追熟抑制効果が得られた。

栽培面では、ホルモン処理、灌水管理、肥培管理の見直しが重要であることを共有した。

これら一連の取り組みにより、普及指導員が環境データを活用した診断・振り返りを行うスキルが向上し、チーム会を通じて産地間のデータ比較や課題の共有が進んだことは大きな成果である。また、生産者への技術情報提供が強化され、軟化玉防止に向けた取組が栽培・流通両面で具体化しつつある。

次年度は、生産者自身がデータを共有し合う仕組みの構築、高温対策資材のさらなる組み合わせ検証、栽培管理の見直しによる軟化防止技術の実証強化など、より実践的な課題解決型のスマート農業推進が求められる。

ウ 有機農業の消費者の理解醸成に向けたイベントの実施

有機農業を拡大していくためには、新技術の導入等による収量向上や品質向上もさることながら、生産物をどのように販売するのか、という販売戦略が不可欠である。その販売戦略の構成要素として、実際に購入する「消費者」の理解醸成が必要であると考えられた。よって本年は、県が主催するイベントである「食と農の博覧会」のブースにおいて、来場者に対して「有機栽培で栽培されたお米を使ったおむすびづくり体験」および「有機農業を実践する生産者との意見交換」の場を設置し、消費者の有機農業に対する理解醸成を実施した。

イベントは10/4、5の2日間にかけて実施し、おむすびづくり体験は延べ151名が参加した。また県内の有機栽培を実践する生産者も5名参加し、自分の農場・農法の説明を実施した。体験者に対するアンケートおよび参加生産者の聞き取りの結果、イベント内容は非常に好評であったことが分かった。体験者による参加生産者の米の継続的な購入につながる事例もあった。

課題としては、参加者のブース滞在時間が短く、有機農業とは？という本質的な部分や、生産者のこだわり等本来伝えなければならぬ部分に時間をさけなかったことが挙げられる。よって、次年度は、時間をとって、特定の参加者に深く理解

してもらような取組をしていきたい。

エ 園芸における人と環境にやさしい栽培技術の導入促進

園芸分野におけるグリーンな栽培体系（減農薬・減化学肥料・温室効果ガス削減等）の現状把握と体系づくりを中心に取組んだ。野菜チーム会で各地区の取組状況を調査・共有し、共通の方向性として「減農薬・減化学肥料・省力化」を柱とする方針を整理した。また、園芸レベルアップ委員会ではネギの施肥体系の見直しと統一について協議を行った結果、高温対策のひとつとして有機質肥料を活用した夏越し性を高める新たな施肥体系の実証を行うことで合意した。

成果として、野菜におけるグリーンな栽培体系の実態把握と事例収集、またネギでの有機質肥料による施肥体系（案）の作成を行った。今後は、有機質肥料の実証圃設置や研究機関と連携した技術情報の整備など、園芸におけるグリーンな栽培体系のマニュアル化等、普及へ向けた具体的な取組みに発展させていく。

(4)園芸タウンの推進

ア 園芸タウンの推進

(ア)園芸タウン共通課題の解決(人材・基盤)

園芸タウン全体の機能強化を目的に、チーム会を開催し、地域ごとの活動状況を共有しながら新規就農支援体制の整備を進めた。まず、各地域での役割分担を明確化するため「新規就農支援ロードマップ」を作成し、これにより関係機関連携の方向性が整理された。また、園芸タウン品目での「就農モデルプラン」の作成を進め、今後の推進品目や経営方向性を検討した。加えて、新規就農者の受入に不可欠な農地情報の把握を進めるため、水稲経営体による雇用受入や輪作としての農地提供の可能性について、アンケートや聞き取りによる調査を地区別に実施した。地域によって提供可能な農地は限られたものの、候補地が一定程度把握され、地域によっては市を中心としたリストアップも行われた。

【成果】ロードマップは坂井・奥越・二州で完成、福井・丹南も年度内完成見込みとなり、関係機関の役割が明確になった。施設園芸中心のモデルプランは資材高騰や猛暑で採算性が課題であるが、水田園芸作物の複合経営モデルなど、地域特性に応じたプランが整理された。農地把握も一部で進んだが、情報が限定的で、今後はより積極的な働きかけが必要とされた。

(イ)地区ごとの園芸タウン推進(戦略・推進)

R7 予定の福井白ネギタウンでは、新規生産者数の目標値の見直しが課題となり、圃場整備と連動した生産拡大の方向性を提示した。丹南ブロッコリータウン (R8 予定) では、生産目標および複合経営モデル作成を支援し、普及指導員・JA と計画検討を重ねた。しきぶトマト・キュウリタウン (R8 予定) では、産地ビジョンや中期計画、栽培方式 (土耕・養液土耕など) について情報提供し、手順整理を支援した。結果、関係機関でのタウン計画づくりの協議が進み、栽培体系や人材育成 (研修施設、カリキュラム) も方向づけがされた。

既存園芸タウンでは、進捗把握と改善点の協議を行い、12 月には県・JA・市町を交えた実績検討会を実施し、「産地戦略」「目指す姿」を具体化する研修を実施した。

【成果】園芸タウンの計画づくりに向けて協議が進み、トマト・キュウリタウンでは産地ビジョンに加え人材育成面でも進展があった。露地野菜では広域連携タウンの必要性が確認され、ブロッコリーやネギで広域的な産地形成の動きを促進できた。

イ ネギの広域産地化

(ア)県域連携による白ネギタウン整備

園芸レベルアップ委員会を通じ、地区部会と連携した産地づくりを推進。地域計画の策定、技術対策、共通の指導体制（「あい作」アプリ活用）を協議した。JA・市場関係者との協議を通じて、需要期（9～12 月）に向けた販売計画や品質（軟白長など）・規格の見直しも進めた。

技術面では、排水対策やケイ酸質資材による高温対策の実証圃を設置し、JA と県が連携して調査。高温に伴う病害の発生も確認され、対策の必要性が共有された。機械化体系の導入についても、リース事業を活用する形で地区別に推進された。

【成果】R6 に県内 5 地区で設立された部会による活動を開始し、各地区で講習会・目揃会などが実施された。「あい作」による情報共有は限定的ながら実証圃のデータ共有に活用できた。また、販売戦略の見直しや加工業務用の取り入れなど、出荷量確保に向けて県全体での産地体制整備が進んだ。技術実証では、ケイ酸質資材による根張り向上が確認され、排水対策と併せた高温対策技術として、次年度以降効果を確認しながら暫定的に導入することとなり、収量向上技術につながる材料が得られた。

【総括】本年度は、園芸タウンの人材・農地・技術・販売を包括する基盤づくりが進展した年となった。地域ごとの計画づくりは課題を抱えながらも進み、特に人材育成体制や広域連携の方向性が明確になった。一方、施設園芸の採算性や農地提供の確保、ネギの収量確保・高温対策など、次年度に継続して取り組むべき課題も依然として多く、関係機関連携を維持しながら戦略的に支援を進めていく必要がある。

(5)園芸タウン整備による産地振興

ア ウメの産地再生に向けた振興ビジョンの作成

ウメ産地の目指す姿を明確にするため、県全域のウメ生産者を対象とした生産意向等のアンケート調査が実施された。調査内容、様式については、JA 担当者と協議し決定した。回収したアンケートの内容を分析し、今後の生産者数や生産量のシミュレーション、地域別の問題点等を明らかにし、対策等について園芸レベルアップ委員会果樹部会等で協議した。協議結果については、坂井、丹南、嶺南の 3 地区において、現状・問題点・課題等を整理して産地振興ビジョンおよび取組みのロードマップが作成され、その後、3 地区を合わせた県全体のウメ産地振興ビジョン・ロードマップが取りまとめられた。次年

度以降は、ウメ産地振興を持続的なものにするため、JA、市町等に対し、県域での協議の場の設置を促し、計画実行の進捗や新たな問題点等の共有と、確実な計画の実行を支援する。

イ ブドウの市場出荷を促進する体制づくり

ブドウの新規就農者が増加し、直売所以外での販路拡大が重要となる中、量販店等からは県産ブドウの出荷が求められている。こうした中、JAでのブドウ出荷部会の設置を目指し、一昨年度から、JA担当者やブドウ生産者と部会の運営方針、組織体制、集荷方法等について協議を続けてきた。昨年度に坂井地区で部会が設立され、今年度は福井地区の部会および県域の部会を束ねる協議会の設立を目標に活動した。福井地区においては、新規就農者に対し、現地巡回指導時等に部会の意義、メリットなどを説明し、入会を呼びかけた。JA担当者とは、部会入会意向の生産者情報の共有、部会体制や設立時期等について協議を重ねた。その結果、12月末に新規生産者等5名による福井地区出荷部会が設立された。県域のブドウ協議会においても、JA本店および県園芸振興課の担当者等と新規就農者情報や産地振興ビジョンの作成に向けた協議を重ね、年度末に設立に至った。

ウ ブドウ新品種の生産振興とブランド化

県域ブドウ協議会がブドウ新品種推進体制の受け皿になることを想定し、JA、県園芸振興課、農業試験場研究員等と新品種の生産振興、ブランド化の方針等について定期的に協議し、商標の公募・登録、苗木生産、栽培技術指導などの役割分担、時期別活動内容等について明確化し、作業フロー図などにまとめた。

新品種のブランド化については、石川県のブドウ新品種「ルビーロマン」などの先進地事例を参考にするため、視察や情報収集などを行った。

(6)畜産経営支援

ア 地域内での自給飼料生産拡大に向けた支援

(ア)技術解決チーム会での検討(3回)

- ・畜産チーム会で飼料高騰対策として地域内での自給飼料生産するための調査研究活動を農業試験場の研究グループおよび高度営農支援課を中心に現地にて調査することについて各事務所より了承を確認した。
- ・第3回畜産チーム会では、今年度の子実トウモロコシ生産の状況について説明、10月初旬からの収穫実演を案内し、将来的な生産拡大についての情報提供を実施した。
- ・第5回畜産チーム会では、子実トウモロコシ生産に関する栽培の作業性および経済性に関する考察についてチーム内で検討した。来年度以降の生産の課題について幅広い角度から議論した。8年度はさらに2ha増加して10ha程度に生産拡大する見込みである。

イ 酪農・肉牛肥育経営への支援

(ア)酪農衛生検査巡回指導 4～1月 坂井管内 延べ6回、4～3月 奥越管内 延べ7回

(イ)新規就農者に対する経営指導 4～2月 奥越管内で乳牛導入、乳製品加工に関する経営指導 延べ3回

(ウ)技術解決チーム(酪農経営改善)による活動 6/4 酪農暑熱対策研修、7/25 乳牛飼養管理技術研修

ウ 鳥インフルエンザ防疫対応<普及計画に記載無し>

- ・昨年とほぼ同時期の10月22日に北海道で高病原性鳥インフルエンザが発生し、以降、令和8年2月28日までに国内で20件の発生がみられた。
- 11月に新潟県においての群発を受け、県内養鶏農家へ緊急の石灰配布を2回実施することとなり、農業試験場で備蓄していた石灰を配布し、配布後使用した分の追加保管(補充)も行った。
- ・福井、奥越、丹南管内養鶏農家14戸対象 11/7～1回目配布、2/6～2回目配布

エ 今後の方向と課題

(ア)自給粗飼料生産への支援

- ・飼料価格高騰を受け、畜産農家の経営安定を図るため、自給粗飼料の品質向上、適正な給与について検討を行い畜産農家の生産性改善をすすめる。

(イ)若手酪農家への経営支援

- ・本県の酪農経営は、生乳生産量の減少、体細胞が高い状況にあり、乳量の増加と乳質安定の生産技術向上対策が必要である。
- ・県内酪農家で世代交代が急速に進む状況で、次世代の農業者に対して経営や飼養管理技術の濃密な支援が必要である。そのため新規経営開始や新たな加工に取り組む酪農家へ集中した技術支援を行う。

(ウ)若狭牛の生産拡大

- ・若狭牛の枝肉は非常に高品質化しているが、枝肉重量が全国平均に比べ低い。また、近年実用化された制限アミノ酸の飼料添加や繁殖ホルモン剤の活用した雌牛の肉質改善を図るなど若狭牛のさらなる品質向上を行う。

(7)調査研究や研修等の活動

「次世代へつなぐ、希望あふれるふくいの食・農・環境計画」に基づき、高度営農支援課と農業経営・流通支援課が連携し、普及指導活動や調査研究等に取り組んだ。

ア 外部評価検討会の実施

幅広い視点から普及指導活動を客観的に評価し、得られた結果を次の普及指導活動に的確に反映することを目的に外部評

働を実施した。

時期：令和7年12月7日（水） 場所：農業試験場 大会議室

対象課題：「ふくいの農業をけん引するリーディングファームの育成」 「ふくい就農モデルの展開」

外部評価委員：福井県指導農業士会会長 来田建治氏、キャリアデザイン総合研究所代表 佐々木史光氏、
福井県立大学経済学部教授 堀田学氏、日本農業新聞福井通信部 増永ひとみ氏

イ 普及指導計画や調査研究への助言

地域の特徴に応じた農業経営支援部・課の普及指導活動が行われるよう普及指導計画検討会、中間検討会、実績検討会を通し助言に当たった。

調査研究については、県内全調査研究の取りまとめにおけるアドバイスや7部門の実績検討会を開催した。

ウ 普及指導員の資質向上

普及指導活動で直面する課題解決を図るため、普及指導員の資質向上をねらいとして、各研修会を開催した。

(ア)普及活動高度化研究大会

時期：令和8年2月5日（木） 場所：サンドーム福井 管理会議棟2階小ホール

発表：農業経営支援部・課から6課題

審査員：キャリアデザイン総合研究所代表 佐々木史光氏、福井県立大学経済学部教授 堀田学氏、北陸農政局生産部
環境・技術課長 福田智之氏、福井県農業協同組合中央会農政生活部長 小林英範氏 他

(イ)普及指導員研修会

時期：令和7年5月23日（金） 場所：福井県民ホール（アオッサ 8階）

講演：「普及活動あるある」ケーススタディ ～初級編、中級編、上級編～」

講師：兵庫県丹波篠山市 農都創造部 農都創造政策官 森本秀樹氏

(ウ)普及指導員パワーアップ研修会

時期：（第1回）令和7年9月30日、（第2回）令和7年11月6日 場所：JA福井県 鯖江中央支店

講演・演習：AIを用いた現状分析による産地ビジョンの策定（講演、グループワーク）

講師：（一社）食農共創プロデューサーズ 長谷川潤一氏

エ 技術解決チーム会の開催

新しい県農業の基本計画の着実な達成に向け、研究員、普及指導員、行政関係者、関係機関の担当者として10の技術解決チーム会を編成し、課題解決にあたった。

オ 全国会議等への出席による情報収集

- ・第13回農業普及活動高度化全国研究大会、令和7年11月19～20日、場所：東京、内容：全国事例発表
- ・農業革新支援専門員全国ネットワーク会議、令和8年1月28日、場所：web、内容：食料システム関係者との連携など

4. 県民に開かれた研究機関を目指す活動

(1)高校・大学受け入れ授業

農業試験場では、県内の農業系学科を有する高校と共動し、出前講座や試験場での実習授業等を行うことで、次世代を担う若手農業者の育成に取り組んでいる。

No	実施日	対象	人数	配属G
1	5月16日	大学生	4名	園芸研究センター ウメ・果樹研究G
2	6月9日	大学生	35名	本場全般
3	6月9～13日	高校生	4名	本場 各研究G
4	7月11日	大学生	50名	本場全般
5	7月30日	中学生	1名	本場全般
6	8月4日	中学生	2名	本場 水稻育種G
7	8月19～21日	大学生	6名	本場、園芸研究センター 各研究G
8	8月18、19、25、29日	大学生	2名	園芸研究センター 各研究G
9	8月25～27日	大学生	2名	本場各研究G
10	9月2～5日	大学生	3名	本場各研究G
11	5月16日	大学生	4名	園芸研究センター ウメ・果樹研究G
12	10月8日	大学生	4名	園芸研究センター ウメ・果樹研究G
13	1月28日	大学生	6名	園芸研究センター ウメ・果樹研究G

(2)プレスリリース実績

No	実施日	タイトル	対応部署
1	5月3日	園芸 LABO の丘「ゴールデンウィークフェスタ」を開催します	園芸 LABO

2	6月13日	有機農業の拡大に向けスマート技術を活用する試験を紹介します	みどり戦略推進研究G
3	6月23日	リーディングファーム育成にかかるセミナー開催	農業経営・流通支援課
4	7月1日	ブドウ市場出荷拡大研修会を開催します	高度営農支援課
5	7月10日	ドローンを活用したいちほまれの生育と施肥診断の技術開発について紹介します	スマート農業研究G
6	7月26日	園芸 LABO の丘「夏フェスタ」2025 を開催します	園芸 LABO
7	8月7日	令和7年度リーディングファーム育成プロジェクト（農業経営塾）開講式を開催します	農業経営・流通支援課
8	9月2日	ブドウ新品種の試食会を開催します	園芸育種研究G
9	10月31日	キウイフルーツ栽培研修会・圃場見学会を開催します	ウメ・果樹研究G
10	11月8日	園芸 LABO の丘「秋フェスタ」を開催します	園芸 LABO
11	12月8日	ふくいの農業女性の意見交換会を開催します	農業経営・流通支援課 高度営農支援課
12	12月15日	LF 育成プロジェクト 経営発展に向けた組織開発基礎研修	農業経営・流通支援課
13	2月5日	令和7年度福井県普及活動高度化研究大会を開催します	高度営農支援課
14	3月5日	リーディングファーム育成プロジェクト「経営発展ロードマップ」発表会	農業経営・流通支援課

(3)講演会・出前講座

No	実施日	講座名	会場	講師	
				所属部署	氏名
1	4月17日	シャインパール・にじのきらめき多収栽培研修「福井県産シャインパールの令和6年度生育・生産結果と次年度の多収栽培に向けて」	福井東部農業施設センター育苗センター	高度営農支援課	中村真也
2	4月18日	学校花壇講習会【フラワーブラボーコンクール】	園芸研究センター	園芸研究センター	山本浩平
3	6月21日	おこめとコムギの今	福井工業大学	品種開発研究部	小林麻子
3	7月4日	県域多収米作見会（嶺南会場） 「多収米（シャインパール）栽培の今後の管理について」	合同会社 天狗山農園	高度営農支援課	中村真也
4	7月11日	県域多収米作見会（嶺北会場） 「多収米（シャインパール）栽培の今後の管理について」	坂井営農経済センター	高度営農支援課	中村真也
5	7月14日	高校生のための「科学・技術者への招待セミナー」	敦賀気比高校	園芸研究センター	佐々木雅
6	7月23日	福井県農業試験場の水稻育種	みどり会	品種開発研究部	小林麻子
7	8月6日	令和7年度いちほまれ総仕上げ大会 「猛暑時の栽培管理について」	J A 福井県 福井営農経済センター	高度営農支援課	中村真也
8	8月12日	ふくい【米穀】生産振興大会 「水稻の品質・収量向上について」 「雑穀の収量向上について」	JA 福井県福井中央支店 大ホール	高度営農支援課	中村真也
9	8月21日	福井のおコメ これまでとこれから	ムーンショット事業 市民講座	品種開発研究部	小林麻子
10	9月25日	職業発見講座	大野高校	次世代技術研究部	清水愛子
11	10月16日	暑さや水不足に負けないおコメの品種開発	クボタふくい 夢農業 2025	品種開発研究部	小林麻子
12	10月30日	第3回【県域】多収米協議会 「シャインパールの本年度の生育結果と次年度栽培に向けて」	JA 福井県 春江支店 2階会議室	高度営農支援課	中村真也
13	10月30日	若狭梅生産協議会視察研修会 ほ場見学およびせん定講習会	園芸研究センター	園芸研究センター	神田美奈子
14	10月31日	キウイフルーツ栽培研修会・圃場見学会	園芸研究センター	園芸研究センター	田中裕介
15	11月4日	集落営農への支援にかかる研修会 「事例紹介」	JA 福井県 鯖江中央支店	農業経営・流通支援課	道坂怜生
16	11月7日	高温に強い品種開発	NOSAI 福井	品種開発研究部	小林麻子

17	11月8日	いちほまれの開発	いちほまれ 2025 収穫祭	品種開発研究部	小林麻子
18	11月12日	令和7年度ふくいスマート農業 セミナー (嶺北会場) 「県内のスマート農業の取組み」	福井県立音楽堂 ハーモニーホール ふくい 小ホール	高度営農支援課	中村真也
19	11月14日	令和7年度ふくいスマート農業 セミナー (嶺南会場) 「県内のスマート農業の取組み」	J A福井県 三方五湖 支店 2階ホール	高度営農支援課	中村真也
20	11月18日	気候変動や社会情勢の変化に対応した福井県の 水稲育種	若狭湾エネルギー 研究センター 第27回研究報告会	品種開発研究部	小林麻子
21	11月24日	暑さに強い、福井のお米	福井市環境フェア	品種開発研究部	小林麻子
22	11月27日	先端企業講演会	藤島高校	園芸研究 センター	佐藤信仁
23	11月28日	花きの生産技術高度化研修	福井県農林水産 支援センター	スマート園芸 研究G	坂本浩
24	12月6日	高志地区農業活性化大会 集落営農のいまを見つめ、未来を考えよう	JA 福井県福井 営農経済センター	農業経営・ 流通支援課	道坂怜生
25	12月9日	福井市認定農業者会研修会 集落営農の次世代継承に向けて	阿難祖領家 ふれあい会館	農業経営・ 流通支援課	道坂怜生
26	12月9日	JA 福井県奥越キク部会全体研修会「生産農家の 所得向上に寄与するコギクの省力生産技術 の紹介」	JA 福井県勝山支店	園芸研究 センター	山本浩平 坂本浩
27	12月11日	多収米協議会全体研修会 「シャインパールの本年度の実績と次年度 栽培に向けて」	福井県産業会館 1号館	高度営農支援課	中村真也
28	12月18日	たんなん野菜生産組合研修会 「野菜の高温対策技術について」	JA 福井県	高度営農支援課	松下ひろみ
29	12月22日	朝日地区営農情報連絡会 集落営農組織の後継者確保対策について	JA 福井県越前町支店	農業経営・ 流通支援課	道坂怜生
30	1月16日	米の品種開発について	若狭町三宅小学校	品種開発研究部	小林麻子
31	1月20日	令和7年度情報交換会 (楸福井精米) 「令和7年産米の振り返りと次年度対策につ いて・福井県産の早生新品種 (越南 315 号) について」	グランディア芳泉	高度営農支援課	中村真也
32	2月3日	福井県指導農業士研修会 「今年度の気象の影響による農作物の状況と 対策について」	AOSSA 3階	高度営農支援課	中村真也
33	2月12日	気候変動に対応した福井県農業試験場の品種 開発	福井県農業協同組合	品種開発研究部	小林麻子
34	2月13日	鯖江市農業発展ネットワーク研修会 「乾田直播栽培について・水稲の高温対策お よび高温耐性品種について」	福井県農業協同組合 鯖江中央支店	高度営農支援課	中村真也
35	2月17日	白ネギ産地振興研修会 「福井県の白ネギ栽培状況と技術的課題」	JA 福井県	高度営農支援課	松下ひろみ
36	2月19日	気候変動に対応した福井県農業試験場の品種 開発	JA ながの須高青年部	品種開発研究部	小林麻子
37	2月24日	水稲早生新品種「越南 315 号」の品種特性	坂井稲作同志会	品種開発研究部	小林麻子
38	2月26日	水稲新品種開発と早生新品種『越南 315 号』	山形県置賜地区(有) 歌丸の里	品種開発研究部	小林麻子
39	2月27日	若狭地区集落営農研修会 集落営農パンフレットについて	JA 福井県嶺南 営農経済センター	農業経営・ 流通支援課	道坂怜生
40	3月12日	坂井地区集落営農研修会・意見交換会 集落営農のいまを見つめ、未来を考えよう	JA 福井県坂井 営農経済センター	農業経営・ 流通支援課	道坂怜生

(4)園芸LABOの丘による園芸教室と体験講座

ア 園芸 LABO の丘の来場者数

月	月別来場者数 (人)		来場者数(累計) (人)	
	令和7年度	令和6年度	令和7年度	令和6年度
4月	3,909	3,472	3,909	3,472
5月	7,911	6,888	11,820	10,360
6月	4,302	3,841	16,122	14,201
7月	5,364	6,128	21,486	20,329
8月	4,255	3,871	25,741	24,200
9月	4,492	3,857	30,233	28,057
10月	4,919	5,942	35,152	33,999
11月	6,510	3,702	41,662	37,701
12月	2,560	2,713	44,222	40,414
1月	1,851	2,402	46,073	42,816
2月	2,437	2,722	48,510	45,538

イ 園芸教室

地域の園芸振興のため、野菜を中心とした栽培技術の基礎を習得する場として、農業者に加え園芸に興味のある地域住民を対象に年間9回の講座を開催した。

また、受講者から品質の良い果物を生産する栽培技術を学びたいとの要望に応え、6月から11月にかけて、延べ3回の果樹栽培に関する講座を開催した。

講義中は受講者から数多くの質問が出される等、野菜栽培への関心の高さが窺われた。

- ・野菜を中心とした栽培講座 令和7年4月25日(金)～令和8年2月27日(金) 9回開催 時間9:30～11:30
- ・果樹特別講座 令和7年6月6日(金)、10月3日(金)、11月16日(日)・23日(日)の3回開催

【場所：いずれも園芸LABOの丘】

(野菜等栽培講座)

No	開講日	講義内容	担 当	対象・参加人数
1	4月25日	開講式 野菜畑の土づくりとその必要性 春播き(定植)野菜・ミニ野菜栽培のポイント	園芸交流課長 宮原講師	一般・ 24名
2	5月2日	主要果菜類の当面の管理とコンパニオンプランツの植付け 主要果菜類・マメ類の病害虫と防除 主要果菜類の生理障害と防止対策	宮原講師	一般・ 19名
3	6月6日	春播き(植え)野菜類ならびに越冬野菜類の収穫 春播き葉茎菜類・根菜類などの病害虫の特徴と防除の一例	宮原講師	一般・ 24名
4	7月4日	夏秋播き(定植)野菜類の栽培ポイント 夏秋播き(定植)野菜類の間引きと追肥	宮原講師	一般・ 27名
5	8月1日	夏秋播き主要野菜類の病害虫と防除 野菜栽培で多い質問とその対策 育ててみたいハーブたち40種	宮原講師	一般・ 26名
6	9月5日	越冬マメ類の播種(定植) まだ間に合う夏秋播き野菜類の播種 夏秋播き主要野菜類の管理と収穫のポイント	宮原講師	一般・ 21名
7	10月3日	秋冬野菜類の管理と収穫 越冬野菜類の管理 越冬野菜類の主な病害虫と薬剤防除	宮原講師	一般・ 24名
8	11月7日	秋冬どり野菜類の収穫のポイントと美味しい食べ方 来年の野菜づくりに備えて	宮原講師	一般・ 21名
9	2月27日	越冬野菜類&ジャガイモ栽培のポイント 閉講式	宮原講師 LABO職員	一般・ 18名

(果樹特別講座)

No	開講日	講義内容	担 当	対象・参加人数
1	6月6日	美味しい果物づくり① -春から収穫までの主な管理-	宮原講師	一般・

				24名
2	10月3日	美味しい果物づくり② -果樹類の花芽分化と施肥 等-	宮原講師	一般・ 24名
3	11月16、23日	家庭果樹のせん定講座	LABO職員	一般・ 22名

ウ 体験講座

園芸に親しむ各種の講座を実施した。

内 容	開催回数 (回)	体験者数 (人)
科学実験	289	3,000
調理実習	190	1,833
工芸体験	318	1,894
合 計	797	6,727

エ 展示・観察

園芸LABOの施設や園地の展示・機器を活用した自然観察会等を開催し、園芸についての普及啓発を行った。

内 容	開催回数 (回)	体験人数 (人)
トマトハウス見学	138	2,136
自然観察	548	8,703
自然体験	48	635
合 計	734	11,474

5. 農業者等の視察対応

- ・2025. 5. 9 福井市足羽小学校 (3、4年生) 「イチゴについて」 55名
- ・2025. 5. 16 ほんのり農園、新潟県農業総合研究所園芸研究センター 2名
- ・2025. 6. 9 福井県立大学創造農学科見学 36名
- ・2025. 7. 7 ローソン・ミツハシ視察「福井県農業試験場の水稻育種」 5名
- ・2025. 7. 11 福井県立大学生物資源学科見学 50名
- ・2025. 7. 11 JA松任白ネギ部会視察研修対応「白ネギ灌水試験について」 15名
- ・2025. 8. 4 福井市大東中学校「米不足解消に向けた取組と品種改良」 2名
- ・2025. 8. 6 三重県土地改良事業団体連合会伊勢志摩支部「コシヒカリの育成と普及」 30名
- ・2025. 8. 19 たんなん大豆生産組合「大豆栽培」 10名
- ・2025. 8. 28 山梨県果樹試験場視察対応「ブドウ品種「福井GR1号」の栽培状況や特性」 1名
- ・2025. 8. 29 千葉県水稻育種視察対応 4名
- ・2025. 9. 1 和歌山県農業協同組合紀南地域本部新庄支店生産販売委員会 8名
- ・2025. 11. 11 福井農林高校1年生見学 35名 (本場)
- ・2025. 11. 14 JAえちご上越あるるん畑利用組合「イチゴの育種」 38名
- ・2025. 11. 26 富山県大門地域営農組合連絡協議会「水稻ブランド米開発」 38名
- ・2025. 11. 28 福井農林高校1年生見学 35名 (園研)
- ・2026. 1. 19 紀ノ国屋視察 「いちほまれの開発」 6名
- ・2026. 1. 20 社会福祉法人福知山学園友就館 3名
- ・2026. 1. 27 和歌山県農業協同組合紀南地域本部三栖青年部 15名
- ・2026. 2. 12 勝山市指導農業士会視察対応 (園芸研究センター、園芸 LABO)
- ・2026. 2. 17 愛媛県農林水産研究所視察対応 1名
- ・2026. 2. 19 JAながの須高青年部 10名
- ・2026. 2. 19 勝山市認定農業者協議会視察対応「スマート園芸研究Gのトマト栽培方式」 20名
- ・2026. 2. 22 愛知県水稻育種視察対応 2名

6. 論文、雑誌、著書、発表、広報等

(1)論文

- ・坂川和也, 猿橋由恵, 三輪直邦, 森川知彦, 中村美香, 中川文雄, 赤堀巧, 堀口芽以, 佐藤信仁, 福島健司, 窪田博之, 吉田貴寿, 神田美奈子, 小林麻子, 阿部洗己, 高野隆志, 冬廣吉朗, 佐藤有一 (2025) ブドウ新品種「福井 GR1 号」の育成とその特性. 福井県農業試験場研究報告 56 : 1-5.
- ・坂本浩 (2025) 大野市で採集されたオオタバコガに対する各種薬剤の効果. 福井県農業試験場研究報告 56 : 6-11.
- ・坂本浩 (2025) 奥越地域のキク圃場におけるキクスイカミキリの被害解析. 福井県農業試験場研究報告 56 : 12-17.
- ・坂本浩 (2025) 発蕾以降のジベレリン散布が6月出し夏ギクの開花および切り花品質に及ぼす影響. 福井県農業試験場研究報告 56 : 18-22.
- ・岩岡悠太郎, 田野井真, 増田周太 (2025) もち性大麦品種「はねうもち」の収量及びβ-グルカン含有率向上に向けた追肥時期の検討と一括肥料の試作. 北陸作物・育種研究 60 : 27-30.
- ・山口泰弘 (2025) 大豆初作土壌と栽培頻度の高い土壌において栽培した大豆品種の生育および根粒着床の違い. 北陸作物育種研究 60 : 23-25.
- ・小林麻子他 (2025) スマート育種支援ツールの普及に向けて. 育種学研究 27 : 87-91.
- ・小林麻子他 (2025) 2系統間のゲノムの違いを可視化するプログラム「ゲノム塗り絵」の開発と利用. 育種学研究 27 : 141-149.
- ・小林麻子, 富田桂, 町田芳恵, 中岡史裕, 林猛, 田野井真, 清水豊弘, 両角悠作, 酒井究, 渡辺脩斗, 渡辺和夫, 佐藤有一, 佐藤信仁 (2026) 多収・良食味で輸出にも向く水稻新品種「シャインパール」の育成. 育種学研究 28 (印刷中)

(2)著書

- ・小島孝夫 (2024) 秋の田起こしと冬の湛水によるニカメイガの防除法. 農業技術体系「作物編」追録 農山漁村文化協会
- ・小島孝夫 (2025) 特集 イネ・ムギ・ダイズの有機栽培 秋の田起こしと冬の湛水によるニカメイガの防除法. 最新農業技術 作物 Vol. 17 農山漁村文化協会 東京. 68-70
- ・清水愛子 : 「ドローン活用によるオオムギの分施肥体系」農業技術体系作物編 追録 47 号 174 の 83 の 8~11
- ・猿橋由恵 : 「片側一文字・V字トリス仕立て」農業技術体系「果樹編」ウメ追録第 40 号 74 の 26-30 農山漁村文化協会
- ・猿橋由恵 : 「ウメ片側一文字・V字トリス仕立て」最新農業技術 果樹 Vol. 18 農山漁村文化協会 東京. 163-168

(3)学会等講演発表

- ・澤崎光希「白ネギ栽培における栽植密度と灌水処理が生育および収量に及ぼす影響」(園芸学会北陸支部 令和6年12月6日 朱鷺メッセ)
- ・山形淳平・藤田雄大・坂本浩「中玉トマトの低段密植栽培における噴霧耕栽培装置の噴霧ノズルの間隔の違いが果実糖度および収量に及ぼす影響」(園芸学会北陸支部 令和6年12月6日 朱鷺メッセ)
- ・田中裕介「キウイフルーツ「東京ゴールド」における誘引方法の違いが生育や果実品質、管理作業時間に及ぼす影響」(園芸学会北陸支部 令和6年12月6日 朱鷺メッセ)
- ・坂本浩「夏ギクにおけるジベレリン剤花蕾処理が切り花品質に及ぼす影響」(園芸学会北陸支部令和7年度研究発表 令和7年12月5日 AOSSA)
- ・山口泰弘「籾殻燻炭施用による大豆地上部および根粒着床への影響」(北陸作物・育種談話会 第62回講演会 令和7年11月28日)
- ・小林麻子「越南系統群の品質に関する発育段階特異的な遺伝子型×環境相互作用」(日本育種学会第148回講演会 令和7年9月10日)
- ・小林麻子「3~4年の保管によるコメの食味関連形質の変化」(日本水稻品質・食味研究会第17回講演会 令和7年11月20日)
- ・小林麻子「日本の水稻育種における現代ゲノム進化ーコシヒカリの影響ー」(日本育種学会第149回講演会 令和8年3月21日)
- ・林猛「水稻早生新品種候補系統「越南315号」」(北陸作物・育種談話会 第62回講演会 令和7年11月28日)
- ・米田考志「レーザー距離計と専用アプリを用いた水稻生育調査の省力化」(北陸作物・育種談話会 第62回講演会 令和7年11月28日)
- ・巻田恵理奈「ラオス稲品種の有用形質」(日本水稻品質・食味研究会第17回講演会 令和7年11月20日)
- ・巻田恵理奈「ラオス稲の乾燥耐性評価について」(日本育種学会第149回講演会 令和8年3月22日)
- ・竹内早希子「コシヒカリの移植時期が生育・収量に及ぼす影響ー「さつき半ばの田植え」の検証ー」(北陸作物・育種談話会 第62回講演会 令和7年11月28日)
- ・坂川和也「皮ごと食べられる赤系ブドウ新品種「福井 GR1 号」」(園芸学会北陸支部令和7年度研究発表 令和7年12月5日)
- ・林恵美子「福井でのイチゴ栽培における摘房技術の検討」(園芸学会北陸支部令和7年度研究発表 令和7年12月5日)
- ・阿部洗己「ミディトマトの草勢強化と早期収穫が軟化発生に及ぼす影響」(園芸学会北陸支部令和7年度研究発表 令和7年12月5日)
- ・清水愛子「ドローンによる空撮画像を用いた水稻「あきさかり」の生育量推定」(北陸作物・育種談話会 第62回講演会 令和7年11月28日)

- ・清水愛子「ドローンによる空撮画像を用いた水稻「あきさかり」の幼穂形成期生育量推定」（日本作物学会 第261回講演会 令和8年3月29日）
- ・田中裕介「無加温ハウス内におけるコンテナ栽培での地温の違いがブドウ‘シャインマスカット’の生育及び収穫期に及ぼす影響」（園芸学会北陸支部令和7年度研究発表 令和7年12月5日）
- ・坂本圭「白ネギの定植時薬剤処理によるネギハモグリバエの防除効果の検討」（第78回北陸病害虫研究会 令和8年2月17日）

(4)雑誌

- ・大塚美鈴、小島佳彰「大規模集落営農における有機農業の取り組みと今後の展開」農業経営通信 No. 297 p.9
- ・小林麻子「JR西日本「西Navi 北陸10月号」」
- ・中村真也「福井県における六条大麦の現状について」米麦改良(2026.3)

(5)広報

ア 日本農業新聞 アグリウモロウ・その他

- ・高温に強い水稻品種の開発：品種開発研究部 林 猛
- ・今年の麦作を振り返って：高度営農支援課 中村真也/追肥による収量向上：品種開発研究部 竹内早希子
- ・今年の稲作を振り返って：高度営農支援課 中村真也
- ・初期雑草の窒素吸収について：品種開発研究部 竹内早希子
- ・キウイフルーツの簡易棚栽培：園芸研究センター 田中裕介
- ・秋冬除草で翌年カメムシ制する：次世代技術研究部 北島義訓（広告運動企画）

イ 福井県植物防疫協会 ふくい植防だより

- ・新害虫「モモヒメヨコバイ」の発生に注意しましょう：次世代研究部 岸本弥恵
- ・隔離溶液土工栽培によるキュウリのセンチュウ対策：園芸研究センター 澤崎光希
- ・コンパクトで楽々作業！早期多収ウメ‘福太夫’片側一文字・V字トレリス仕立て：園芸研究センター 猿橋由恵
- ・大麦の越冬後幼穂長からの出穂予測：次世代技術研究部 山口泰弘
- ・ドローンを活用した分施肥体系：次世代技術研究部 清水愛子
- ・2025年産農作物等の被害状況について：次世代技術研究部 北島義訓

(6)その他

- ・農業者向け意識啓発パンフレット「目指そう！持続可能な集落営農」（令和7年12月）
編集：企画・指導部（編集担当：農業経営・流通支援課 道坂怜生）
- ・指導者向け資料「集落営農の次世代継承に向けて～集落営農支援にかかる手引書～」（令和8年3月 第2版）
編著：企画・指導部（編集担当：農業経営・流通支援課 道坂怜生）
- ・FBC ラジオ「ふむふむいっばいラジカフェ」 令和8年2月8、15日 「水稻品種開発について」小林麻子
- ・福井の梅 第115号.3-4 令和8年2月福井ウメ振興協議会発行「令和8年ウメの防除および施肥について」神田美奈子

7. 職員の研修、客員教授の招聘、職員の受賞

(1)客員教授の招聘

アドバイザーボード

- ・令和7年5月～令和8年2月
栽培コンサルタントによるオンラインセミナー
トマト 齋藤章（デルフィージャパン）全10回
イチゴ 加納賢三（デルフィージャパン）全10回
- ・令和8年2月9～10日
七夕高也（公立千歳科学技術大学 理工学研究科 教授）
「イネおよびイチゴ等の植物の形質評価の自動化とデータ解析」

(2)職員の受賞

- 全国農業関係場所長会研究功労者表彰
小林麻子「良質・良食味水稻新品種の育成とその育種遺伝学的基礎の解明」

8. 一般報告

(1) 施設

ア 本場

福井市寮町辺操 52-21

本場本館（鉄筋3階建）	2,524.52	m ²
作業室その他64棟（農業研修館、近代化センター含む）	8,830.59	m ²
計	11,355.11	m ²

宅地	29,949.52	m ²
田	136,129.78	m ²
畑	66,397.00	m ²
原野	353.00	m ²
山林その他	61,003.00	m ²
計	293,832.30	m ²

イ 園芸研究センター

三方郡美浜町久々子 35-32-1

本館（鉄筋2階建）	1,152.91	m ²
園芸体験施設「園芸LABO」（木造1階建）	580.50	m ²
収納調査棟その他16棟	2,591.69	m ²
計	4,325.10	m ²

宅地	108.76	m ²
田	21,071.50	m ²
畑	52,587.60	m ²
原野	1,878.80	m ²
雑種地	3,637.30	m ²
園芸体験施設用地	23,395.57	m ²
計	102,679.53	m ²

(2) 予算

ア 歳入(令和7年度決算額)

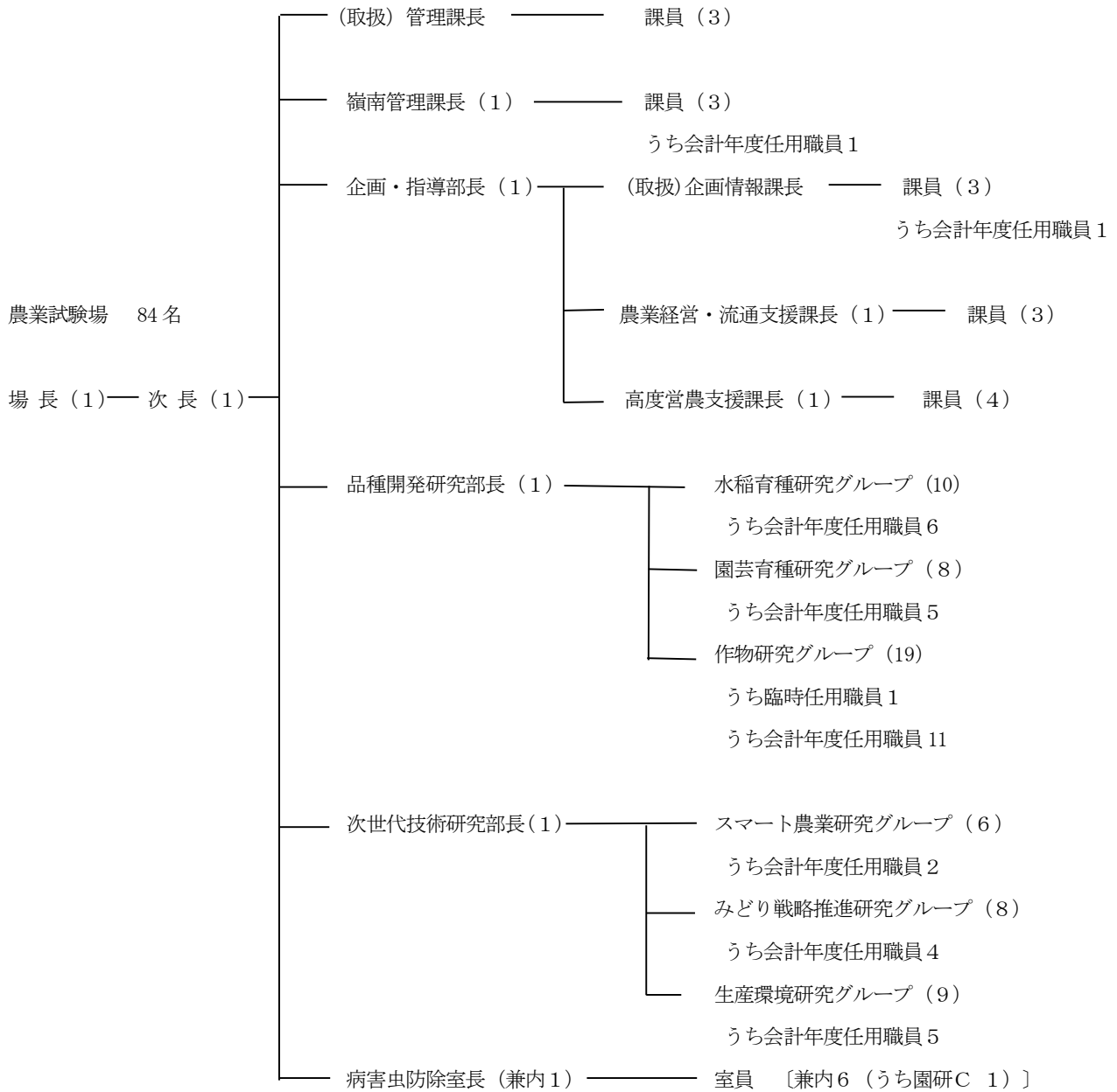
項目	決算額(千円)	摘要
使用料	67	行政財産使用料
財産運用収入	1,541	建物貸付料、特許権等実施料
財産売払収入	16,584	農産物売払代金
雑入	2,658	電気料個人負担金、水道料個人負担金、園芸LABO体験料、その他
計	20,850	

イ 歳 出(令和7年度決算額)

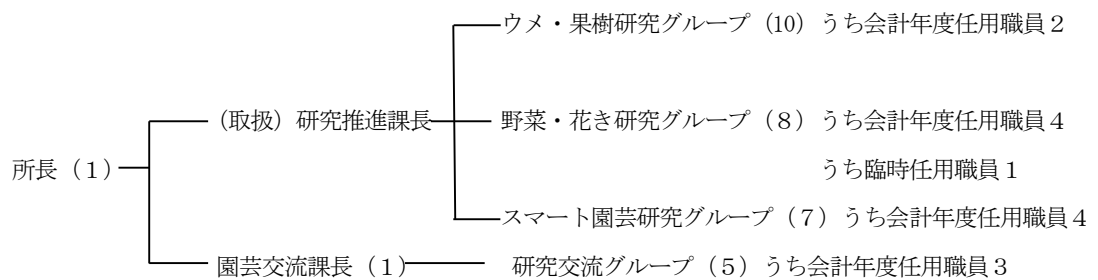
項 目	決算額(千円)	摘 要
本 場 運 営 費	84,873	農業試験場の維持管理、人件費、圃場管理業務委託
園芸研究センター運営費	57,962	園芸研究センター・圃場・母樹園等の運営維持管理 園芸体験施設の運営維持管理、園芸教室講師謝礼、大規模修繕
戦 略 的 研 究 開 発	2,089	市販品種比較 病気に強く省力生産できるミディトマト新品種の育成
農 林 水 産 業 の 技 術 開 発	300	効率的な白ネギ灌水技術の確立
中 小 企 業 振 興 費	19,687	緑肥等を組み合わせた持続可能な水田利用体系の確立 中山間の未来をうのおす超省力コンパクト園芸の確立 ウメの超省力・スマート果樹栽培体系の確立 小ギク生産拡大に向けた省力生産技術の確立 ドローンを活用した生育診断に基づく施肥技術開発 水稻の高温登熟耐性に関する育種素材の育成と新規選抜技術の確立 8月出荷で高収益化！ブドウの早期収穫技術の開発 【新】スマート農機を活用した水稻有機栽培技術の確立 【新】大規模園芸に対応したトマトの超多収・安定生産技術の開発
農 業 総 務 費	5,157	試験研究課題化・評価事業、人件費（会計年度任用職員共済費）等
農 業 経 営 対 策 費	1,707	女性活躍応援事業、次代の農業担い手育成事業
農 作 物 対 策 費	15,099	基本調査事業、原原種原種ほ設置事業、優良種子生産体制確立事業、 肥料検査登録事業、土壌由来温室効果ガス事業、モニタリング調査事業、 基準点調査事業、優良品種の育成事業
農 業 改 良 普 及 費	5,682	普及指導員研修費、県域普及員活動費、巡回指導費、 農山漁家生活近代化センター費
植 物 防 疫 費	5,239	農薬抵抗性検定事業、病害虫発生予察事業、病害虫防除所運営事業
財 産 管 理 費	132	県有自動車管理費
計	197,927	

(3)組織と職員数

(令和7. 10. 1現在)



(附置機関) 園芸研究センター 32名



職員数 116名

(事務職員 12名、技術職員 19名、研究職員 35名、臨時任用職員 2名、会計年度任用職員 48名うち嘱託 3名)

(4)人 事

職 種 別 人 員

(令和7.10.1現在)

職 名	行 政 職		研究職	臨時 任用 職員	会計 年度 任用 職員 (嘱託)	会計 年度 任用 職員 (パート)	計	備 考
	事務	技術						
技術職員 場 長			1				1	
事務職員 次 長	1						1	
課 長	1						1	
総括主任								
主任	1						1	
企画主査	3						3	
主 査	5						5	うち 再任用職員 2
主 事	1						1	うち 再任用職員 1
技術職員 部長・所長		1	3				4	
課 長		3					3	
主 任		4					4	
主任研究員			10				10	
企画主査		2					2	
研 究 員			7				7	うち 再任用職員 3
主 査		3					3	うち 再任用職員 1
主 事		6	14	2			22	
会計年度任用職員(嘱託)					3		3	園芸交流推進員
会計年度任用職員 (パートタイム)						45	45	
計	12	19	35	2	3	45	116	

(5)主な備品等(令和7年度、50万円以上)

品名	数量	金額(円)	型式
農業用トラクター	1	5,940,000	クボタ SL350SPFQPC
乗用除草機用自動操舵システム	1	2,482,143	トプコン XD/AGS-2-SET
グロースチャンバー	1	2,013,000	日本医化器械製作所 LH-241PFST-SP
多目的冷却遠心機	1	1,287,000	トミー精工 CAX-571
ポータブル気孔観察デバイス (園研センター)	1	997,700	Happy Quality HQ-1010
大判カラープリンター	1	792,000	エプソン SC-T7750D
乗用草刈機	1	729,080	やまびこ 共立乗用モア RM953X/K
ロボット草刈機 (園研センター)	1	649,000	本田技研工業 HRM400JC
穀類搬送機	1	533,500	石井製作所 Gコン GZ2S-BLR